

徳島県文化財調査概報

昭和 56 年度
(1981)

徳島県教育委員会

序

本書は、徳島県教育委員会が昭和56年度に実施した埋蔵文化財調査概報であります。

昭和56年度には、吉野川北岸農業水利事業に伴う調査、県道鳴門池田線改良工事や国道193号線改良工事に伴う調査も実施されましたが、いずれも膨大な資料であるため現在整理中であります。これらの報告については次年度に刊行することにいたします。したがって本書には一応整理の完了した「大毛島第22・23区遺跡（仮称）」の発掘調査の概要のみを記録することにいたしました。

なお、本調査にあたって多大の御協力と御援助を賜った関係機関、特に本州四国連絡橋公団鳴門工事事務所、並びに地元住民の方々に対し、厚くお礼を申し上げます。

昭和58年 3月31日

徳島県教育委員会

教育長 中 田 清 春

「大鳴門橋」架橋関連工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査

大毛島第22・23区遺跡（仮称）

例 言

- 1 本書は大鳴門架橋に関連した国道28号線改良工事に伴う発掘調査概要報告である。
- 2 発掘調査は、本州四国連絡橋公団鳴門工事事務所の要請をうけて徳島県教育委員会文化課が実施した。
- 3 本書に収録した大毛島第22・23区遺跡は昭和56年8月31日から昭和57年3月15日まで行った。
- 4 本書の遺構についてはすべて松永が担当し、遺物についてはすべて多田が担当した。
- 5 本書で用いた絶対高は標高をあらわし、方位はすべて磁北である。
- 6 今回の一連の調査において、徳島県文化財保護審議会秋山泰委員（鳴門市史編算室）からは御指導と御教示を受け、また菅原康夫・島巡賢二・河野雄次・林慎二（県教育委員会文化課）の各氏には調査を通じて協力を得た。また調査全般にわたって本州四国連絡橋公団鳴門工事事務所にお世話になり誌上をもってお礼を申し上げる次第であります。
- 7 調査は以下の組織で行った。

調査主体 徳島県教育委員会文化課

調査総括 立花博（文化課文化財保護班長）

調査事務 清水博（文化課庶務係長）、大八木芳子（文化課主事）

調査担当 松永住美（文化課社会教育主事）

調査員 多田寿一（文化課文化財調査員）、小笠原賢、井上章生、滝山雄一（文化課文化財調査員・当時）

作業員 市川栄二、大岩正幸、岡本増吉、勝浦真次、川口重治、木下明、中長偉臣、藤田美一、益岡秀樹、三木秀夫、南谷俊朗、山田勉、大崎孝仔、鹿島秀子、北野清子、豊田フミ子、新開玉枝、中長米子、大頭君江、高橋八千代、福居恵美子、藤田恵美子、益井タカ子

大毛島第22・23区遺跡(仮称)目次

〈本 文〉

I	遺跡の位置と環境	1
II	調査の経過	2
III	大毛島第22区遺跡の地形と現状	5
IV	基本層序	5
V	遺構	8
VI	遺物	11
VII	大毛島第23区遺跡の地形と現状	25
VIII	基本層序	25
IX	遺物	26
X	まとめ	27

〈挿 図〉

第1図	大毛島第22, 23区遺跡と周辺の遺跡	29
第2図	大毛島第22区遺跡地形測量図	31
第3図	大毛島第22区遺跡トレンチ配置図	33
第4図	大毛島第22区遺跡土層図	35
第5図	遺構配置図	36
第6図	溜め池状遺構	37
第7図	土器だまり遺構(SK-02)土器出土状況及び断面図	38
第8図	土壙状遺構(SK-01, 03)平面図及び断面図	39
第9図	土壙状遺構(SK-04, 05, 06)平面図及び断面図	40
第10図	土壙状遺構(SK-07, 08)平面図及び断面図	41
第11図	大毛島第22区井戸跡・集石遺構・灰原遺構図	43
第12図	攪乱層内出土遺物実測図	13

第13図	土器だまり一括遺物実測図	15
第14図	灰原内出土遺物実測図	17
第15図	集石内出土遺物実測図	19
第16図	集石下層出土遺物実測図	20
第17図	太型蛤刃石斧・有溝礫実測図	21
第18図	石鏃・剥片実測図	22
第19図	大毛島第23区遺跡地形測量図及びトレンチ配置図	45
第20図	大毛島第23区遺跡土層図	46
第21図	第23区出土遺物実測図	27

〈図 版〉

図版 1	大毛島第22区遺跡調査前，溜池状遺構	47
図版 2	土壇状遺構（S K—03，04，05）	49
図版 3	土壇状遺構（S K—02，03）	51
図版 4	土壇状遺構（S K—04，05，06）	53
図版 5	土壇状遺構（S K—07，08）	55
図版 6	井戸状遺構・集石遺構	57
図版 7	集石遺構	59
図版 8	土器だまり遺構（S K—08）出土状況	61
図版 9	遺物出土状況	63
図版10	土器出土状況	65
図版11	作業風景	67
図版12	攪乱層内出土遺物	14
図版13	攪乱層内出土遺物	14
図版14	攪乱層内出土遺物	69
図版15	土器だまり一括遺物	71
図版16	土器だまり一括遺物	73
図版17	灰原内出土遺物	75

図版18	灰原内出土遺物	77
図版19	集石内出土遺物	79
図版20	集石下層出土遺物	20
図版21	第22区石器及び自然遺物	81
図版22	石鏃・剥片・PUMICE	83
図版23	大毛島第23区全景	85
図版24	トレンチ	87
図版25	出土遺物	89

I 遺跡の位置と環境（図 第1図）

本遺跡（第22区，第23区遺跡）は，徳島県の北東端にある大毛島内にある。大毛島は，ほぼ南北に細長く大毛山系が島中央部を走行し，東側はやや弓なりになった直線上の砂浜の海岸線となり，西側は瀬戸内海が複雑に入りくんだ円礫，重礫の海岸線を呈している。この海岸線の相違は，東海岸は潮流，風により砂が堆積し海岸線が次第に後退し現在の地形を形成していると考えられ，西海岸は冬の季節風により絶えず海岸線が波によって洗われており，相当古い時期から海岸線とほぼ同様あるいは侵蝕されているものと思われる。

本遺跡はこの大毛西海岸が大きく入江状に入りくんだ海岸線よりわずかに入った地点にある。西は冬の季節風以外は非常におだやかなウチノ海があり，対岸に島田島が望める。東はすぐ急傾斜の大毛山系となっているのである。

この大毛山系を形成している地質は今から7～8千万年前の上部白亜紀和泉層群であり，この大毛島第22区遺跡，第23区遺跡附近における地層は，泥岩層と砂岩層がほぼ並行に互層となって形成されているようであり，本調査の各トレンチの土層内の岩盤や，附近の山系の切断面からもそのことがうかがえるのである。

大毛島内における遺跡の状況は，以前は弥生時代が上限であったが，昨年6月大毛島と本島を結ぶ本四架橋に伴う撫養橋下部工事（図 第1図）によって海底下10メートルの土壌内より，約2万年前のサヌカイト製の角礫，剥片が炭化木材と共に出土し，少なくとも後期旧石器の存在が立証されたのである。

縄文時代の遺構・遺物については確認されていないが，昭和55年度の第39区遺跡のA調査区において標高4m前後で円礫の自然遺構（図 第1図）が検出され，附近の岩膚に海蝕痕がみられるところから断定的根拠とはならないが，一応縄文前期の海進期における旧海岸線と思われる。

弥生時代の遺跡としては，鳴門公園千畳敷下遺跡（図 第1図）において弥生中期の土器片，石鏃2点が採集されているのが本島での唯一の遺跡となっているのである。なお弥生時代に伴うと思われる石鏃は島内の数か所から出土している。

古墳時代に入ると，本島内において遺跡が顕著に見られるようになる。大鳴門橋建設現場よりやや南東に瀬戸内海に面してつき出た海岸段崖上に北山古墳，亀浦フェリー乗場の南側で瀬戸内海に面してつき出した半島上に納言山古墳群，大毛島南東端に松瀬山古墳群が所在している。いづれも組合式石棺と記録されているが，現在では詳細なことは不明である。

古墳時代から歴史時代にかけての生産遺跡として，第6区遺跡，第39区遺跡等が考えられるが，現段階では今後の検討を要するようであり，断言はできないので省略する。

歴史時代に入ると，土佐国と大坂（阪）を結ぶ海上交通の要所として栄え，土佐日記をはじめとする文献などからうかがえるのである。歴史時代の遺跡としては，土佐泊廃寺（平安前期）が確認されており，唐草文軒平瓦が出土している。

瀬戸内海に面した他の島々の遺跡としては，島田島に室古墳群2基，田ノ浦古墳群3基，阿波井神社古墳群3基，島向古墳1基が記録されている。更に遺物散布地としては，室漁港のすぐ裏の平坦地の畑から須恵器片，土師器片が多量に出土しており，室古墳群あるいは田ノ浦古墳群に伴う集落址あるいは生

産遺跡の存在が考えられる。クスノ海をへだてた高島においては竹島古墳群 6 基が記録されているが現在では詳細は不明である。

以上、国道28号線改良工事に伴う調査は昭和58年3月末現在で立会調査を含めて39か所のうち32か所の調査を終了した。現在までの調査の状況からみて、本島内での遺跡は海戸内海に面した半島先端の3古墳群の所在地を除いては、殆ど平地上あるいは台地上に位置しており、今後大毛島内での調査についての示唆を与えたものと思われる。

II 調査の経過

国道28号線改良工事に伴う埋蔵文化財調査は、まず昭和52年4月28日から5月20日にかけて分布調査を行い計39か所の遺跡の存在あるいは可能性のある地点を確認した。

その結果に基づいて本州四国連絡橋公団（以下本四公団と略）との協議により、工事着手前に発掘調査及び立会調査を行うこととし現在に至っている。発掘調査は、昭和52年度に1区、3区、4区の立会調査と2区、6区の北半分、昭和53年度5区、6区の南半分、7区、昭和54年度16区の南半分、21区の南半分、昭和55年度39区の調査が行われてきた。昭和56年度においては、11区、12区、13区、14区、22区、23区、24区、25区、26区の発掘調査を行い、16区の北半分、17区、18区、19区、20区の立会調査を行った。

その結果、22区、23区を除いては遺跡・遺構が見られなかったため、今回は22区・23区の調査報告を行い他は本報告の際に行う予定である。

第22区遺跡は昭和56年8月31日から昭和57年3月15日。第23区遺跡は昭和56年9月5日から11月19日にわたって行ったものである。

以下、調査日誌の概略を記する。

調査日誌抄

- 8月31日 22区・23区下草刈り及び樹木伐採開始。
- 9月4日 22区のごみ捨て場となっているごみの焼却を行う。
- 9月5日 22区・23区ベンチマーク設置及び23区樹木伐採。
- 9月7日 22区地形測量開始。23区下草刈り、樹木後かたづけ及び焼却。
- 9月8日 22区・23区調査前写真撮影。
- 9月10日 22区トレンチ設定及び第1層排土。
- 9月11日 22区地形測量完了、23区地形測量トラバース設定。
- 9月14日 23区地形測量開始。
- 9月15日 22区の図面整理及び写真整理。
- 9月18日 23区地形測量完了。
- 9月22日 22区第1トレンチ第15層より土器片出土。遺跡の存在の可能性が出てきた。
- 9月24日 22区第1トレンチ中央部で井戸跡らしき遺構が確認された。
- 9月26日 22区第1トレンチ第15層のやや北よりで大型蛤刃石斧1点が出土。

- 9月28日 22区第1トレンチで土壌らしき遺構（SK-01）を確認。第2、第3トレンチ第3層排土。
- 9月29日 22区第3トレンチ西端部で溜め池状遺構を検出。
- 10月5日 第1トレンチ第15層よりサヌカイト製打製石鏃1点出土。
- 10月6日 本四公団副所長以外5名来訪。22区の調査について遺構・遺物が確認されていることから全面発掘に変更することについて基本的に合意する。
- 10月7日 22区地形測量図トレース及び遺構略図の作製，集石遺構検出。23区トレンチ設定。
- 10月8日 22区第1トレンチ内集石遺構検出。23区第2、第3トレンチ第1層排土。
- 10月12日 22区トレンチ内遺構写真撮影。23区第2、第3トレンチ第2層排土。
- 10月13日 22区第1トレンチ土層面精査。23区第1トレンチ第1層排土。
- 10月15日 22区第1トレンチ土層図実測開始。
- 10月16日 22区第1トレンチ土層セクション土色入れ。23区第1トレンチ第2層より須恵器片出土。
- 10月17日 22区第2、第3トレンチ土層セクション図作製及び土色入れ完了。23区第1トレンチ第1層より須恵器，土師器が出土。地形からみて斜面を削平し開墾していることから，以前は何らかの遺構が存在していたと想定。
- 10月22日 台風24号接近の為，資材撤収。
- 10月26日 23区第1、第2トレンチ第2～4層排土。第1トレンチ第2層上面より須恵器片出土。
- 11月4日 22区全面発掘の為，盛土排除開始。23区第4トレンチ設定。
- 11月5日 22区盛土排除。23区第1、第2、第3トレンチ清掃及び写真撮影。土層面精査。
- 11月9日 22区攪乱土排土。土師器片が出土。23区第1・第3トレンチ土層セクション図完了
- 11月10日 22区盛土排除及び拡張区の樹木伐採。23区第2トレンチ土層セクション図完了。
- 11月11日 23区第1トレンチ埋め戻し開始。
- 11月13日 22区盛土排除完了。23区第4トレンチ第1層，第2層排土。染付磁器，土師器片出土。
- 11月17日 23区第4トレンチ列石状況撮影（後に自然堆積と判明）及び第3層排土。
- 11月18日 22区第1層，第2層排土。23区第4トレンチ土層セクション図作製。本四公団へ22区中間報告提出。
- 11月19日 23区各トレンチ土色入れ完了。一部の埋め戻しを残して本調査区の調査完了。
- 11月21日 22区第2層排土中。攪乱層内より大型蛤刃石斧刃部出土。
- 11月27日 雨の為，図面縮尺，写真整理，器材補修。
- 12月3日 22区第4・第5層排土。溜め池状遺構検出。
- 12月4日 22区グリッド設定杭打ち。
- 12月5日 22区第14、第15層排土。土器溜り遺構確認，検出を行う。
- 12月7日 22区第14・第15層排土。集石遺構及び土器溜り遺構検出。
- 12月8日 22区グリッド及びトレンチ位置図平板入れ作業を行う。
- 12月10日 22区第15層，第16層排土中。土器溜り遺構測量準備。井戸跡，溜め池状遺跡遺構平板実測。
- 12月11日 22区土器溜り遺構実測開始。土器片を順次取り上げを行う。
- 12月14日 22区土器溜り遺構実測。海側黒色土層排土。

- 12月16日 22区集石遺構排土及び灰原遺構を確認。灰原遺構の検出開始。
- 12月17日 22区集石遺構及び土器溜り遺構出土状況写真撮影。集石遺構実測準備。灰原遺構及び土壌状遺構の確認及び遺構検出。
- 12月18日 22区土器溜り遺構、集石遺構、灰原遺構実測。
- 12月24日 22区集石間排土及び集石遺構平面図、土器溜り遺構平面図及びエレベーション作図。
- 12月28日 22区土器溜り遺構、集石遺構平面図作図。調査現場御用納め。
- 1月5日 調査現場御用始め及び図面整理。
- 1月6日 22区土器溜り遺構、集石遺構平面図作図。23区第2、第3、第4トレンチ埋め戻し開始。
- 1月9日 22区調査区東端の粘質土しみこみ部分にサブトレンチを入れ堆積状況を確認する。
- 1月12日 22区土器溜り遺構平面図及びエレベーション図完了。森浩一同志社大学教授（県文化財保護審議会委員）現地視察。
- 1月19日 22区海岸より西端の土層セクション図作製及び土色入れ完了。
- 1月20日 22区北西からの激しい季節風の中で集石遺構実測。
- 1月23日 22区集石遺構平面図完了した図面より順次エレベーション開始。
- 1月30日 22区現地説明会を開催。約70名程参加。
- 2月2日 22区集石遺構実測。
- 2月5日 22区土壌状遺構（SK-07）検出中石鏝1点出土する。
- 2月6日 22区集石遺構実測及び集石遺構間排土。排土中より石鏝出土。土壌状遺構検出。
- 2月8日 22区集石遺構内出土遺物写真撮影。
- 2月13日 22区集石遺構間排土及び実測。集石遺構内遺物取り上げ。
- 2月18日 22区排土及び集石遺構実測。一部遺構のない調査区東端部分の埋め戻しを行う。
- 2月22日 22区集石遺構間排土及び集石基底部分実測開始。
- 2月23日 22区集石遺構基底部清掃及び写真撮影と実測を行う。
- 3月1日 22区土壌状遺構確認及び検出。灰原遺構内より土器片がやや固まった状態で出土する。
- 3月2日 22区土壌状遺構検出。灰原遺構内土器出土状況写真撮影及び土器取り上げを行うとともに灰原内排土作業を行う。
- 3月3日 22区土壌状遺構検出及び実測と写真撮影を行う。灰原下層内の土器片取り上げを行う。
- 3月4日 22区各グリッド集石遺構下掘り下げを行い堆積状況を確認。その結果、遺構・遺物は見られず下層には遺跡の存在がないことが確認された。
- 3月6日 22区灰原遺構土層セクション図作製。
- 3月8日 22区だめおしトレンチ発掘。本四公団へ昭和57年度予算書を提出する。
- 3月9日 22区埋め戻し及びだめおしトレンチ写真撮影。
- 3月11日 22区杭抜き及び遺跡周辺の掃除。室内では遺物整理及び実績報告用図面トレース作業を行う。
- 3月12日 22区業者委託によるユンボで埋め戻し開始。室内では器材整理及びトレース作業。
- 3月13日 22区ユンボによる埋め戻し完了。プレハブ内の整理及び器材員数確認作業。
- 3月15日 トラックで埋文整理室へ資材運搬。本年度の発掘調査作業を全て完了する。

III 大毛島第22区遺跡の地形と現状

22区遺跡(図 第2図)は北側、南側、東側を大毛山系に囲まれ、西側をウチノ海に面してわずかに開けた最大幅35m余りの凹地のやや西に向って傾斜した平坦地にあり、標高3.5mから1.5mの高さに位置する。地形図を見てわかるように南西隅は戦後における真珠養殖場あるいはワカメの作業場としての建物のコンクリート基礎部分によって現状が大きくかわり、北半分の等高線の乱れは、附近の古老の話から推定すると、第2次世界大戦中本土防衛に際しての軍事用小型船舶の隠し場所として開削されていたようである。更に中央部において2か所程凹みがみられ、調査区全域において自然地形当初の状態の所は全くみられないと言っても過言ではなく、日当りの非常にわるいわずかな平坦地を幾度となく土地利用が激しく行われていることを物語っており、大毛島内における第21区遺跡とともに西海岸線でのわずかに存在する平坦地の利用をうかがわせる。

現状としては、大毛島内のゴミ捨て場となっていたようであり、残土、コンクリート塊の廃材、灰ワカメ等の投棄、スイカ等、相当量の色々なものが投げこまれており、調査に入る以前の樹木の伐採、清掃に悪臭とハエに悩まされながら相当な労力を要した。

IV 基本層序

第1トレンチ(図 第4図)

—調査区中央南北トレンチ—

第1層は7.5YR $\frac{5}{2}$ 黒褐色土層でいわゆる腐葉土層である。現代陶磁器及び染付磁器等が含まれている。

第2層は10YR $\frac{5}{2}$ にふい黄褐色礫まじり砂質土層であり、いわゆる大毛山系における風化作用における斜面から流入した堆積土層である。

第3層は10YR $\frac{5}{2}$ 明黄褐色砂礫まじり粘質土層であり、第2層と同様の堆積土層と考えられる。

第4層は10YR $\frac{3}{2}$ 暗褐色砂まじり粘質土層である。第5層に部分的に混入した層と考えられる。

第5層は2.5Y $\frac{5}{2}$ オリーブ褐色大礫まじり粘質砂土層であり、遺跡上面を覆っている堆積土層であり、須恵器、土師器片等を含んでいる。

第6層より第10層までは、戦時中における小形船舶用船渠坑跡の2次堆積土層である。

第6層は10YR $\frac{5}{2}$ にふい黄褐色礫まじり粘質土層、第7層は10YR $\frac{5}{2}$ にふい黄褐色砂質小礫まじり層、第8層は10YR $\frac{5}{2}$ 明黄褐色小礫まじり層、第9層は10YR $\frac{5}{2}$ 黄褐色粘質砂土層、第11層は10YR $\frac{5}{2}$ にふい黄褐色礫まじり粘質砂土層である。

第11層は10YR $\frac{5}{2}$ 明黄褐色砂質土層であり第12層とともにこの大毛山系の岩盤上層であると考えられ、人為的な影響を受けていない形成層と考えられる。

第12層は10YR $\frac{5}{2}$ 明黄褐色粘質小礫まじり土層であり、第11層が風化作用によって形成された層と考えられる。

第13層から第16層が遺構上面層あるいは遺構内覆土と考えられる。

第13層は2.5Y $\frac{1}{2}$ 灰黄色小礫まじり粘質砂土層であり、太型蛤刃石斧、石鏃等がこの層より出土している。

第14層は2.5Y $\frac{1}{2}$ 黄灰色粘質土層(炭化物を少量含む)であり、第13層内にはさみこまれた形で堆積しており本来は第13層と同じ堆積土層と考えられるが、ある一定期間の堆積時間の差があったと思われる。

第15層は10Y R $\frac{3}{4}$ 暗褐色粘質土層であり、この層が集石遺構・土器溜り遺構・土壙状遺構の覆土であり、弥生時代から古墳時代にかけての遺物を多く含んでいる。

第16層は2.5Y $\frac{1}{2}$ 灰黄色小礫まじり粘質土層であり井戸状遺構の上部堆積土層である。

第17層は10Y R $\frac{3}{4}$ 黒褐色粘質土層であり、井戸状遺構上層に堆積している層であり染付磁器が出土している。この第17層に入っている遺物からみて、第2層～第5層にかけては江戸時代後期以降の堆積土層であると考えられる。

以上第1トレンチについて述べてみたが、本来の自然堆積を示しているのは右端の下層のみであり、殆ど人工的な2次堆積を示しているのである。

第2トレンチ(図 第4図)

—調査区東側南北トレンチ—

第1層は7.5Y R $\frac{2}{2}$ 黒褐色土層であり第1トレンチと同様の腐葉土層である。

第2層は7.5Y R $\frac{2}{2}$ 灰褐色礫まじり砂質粘土層であり、開墾等によって人為的な痕跡を残している層と考えられる。

第3層～第8層にかけては東北の山系からの流入土層と考えられいずれも無遺物層である。

第3層は2.5Y $\frac{1}{2}$ オリーブ褐色小礫まじり砂質土層、第4層は2.5Y $\frac{1}{2}$ 黄褐色砂質土層、第5層は10Y R $\frac{3}{4}$ にぶい黄褐色粘質土層、第6層は2.5Y $\frac{1}{2}$ 明黄褐色大礫まじり砂質土層、第7層は10Y R $\frac{3}{4}$ 灰昔褐色礫まじり粘質土層、第8層は10Y R $\frac{3}{4}$ 暗褐色大礫、小礫まじり粘質土層である。

第9層～第15層も人為的な堆積ではなく自然堆積の状態を示しているようであり、遺物は含んでいないようである。

第9層は10Y R $\frac{3}{4}$ 暗褐色粘質土層(7.5Y R $\frac{3}{4}$ 明褐色礫層を少量含む)、第10層は10Y R $\frac{3}{4}$ 褐色礫まじり粘質土層であり、いわゆる岩盤直上層と思われる。

第11層は10Y R $\frac{3}{4}$ にぶい黄褐色粘質砂土層(10Y R $\frac{3}{4}$ 明黄褐色礫層を含む)であり、南側山系からの流入土と考えられる。

第12層は10Y R $\frac{3}{4}$ にぶい黄褐色礫まじり砂質土層であり、第11層と同様の堆積と考えられる。

第13層は10Y R $\frac{3}{4}$ 褐灰色砂質土層(10Y R $\frac{3}{4}$ 明黄褐色礫層を少量含む)である。

第14層は10Y R $\frac{3}{4}$ 灰黄褐色粘質土層であり、第15層は10Y R $\frac{3}{4}$ 暗褐色粘質土層(10Y R $\frac{3}{4}$ 明黄褐色礫層を50%含む)であり、非常に固く第9、第10層と同じく岩盤直上層あるいは岩盤上面層と思われる。

以上第2トレンチについて述べたが、第2トレンチ中央部は開墾によって2次堆積し、左右は両側の

山系からの流入土の堆積層を示しているようである。

第3トレンチ (図 第4図)

—調査区南端・東西トレンチ—

第1層は他のトレンチと同じく7.5Y R $\frac{2}{2}$ 黒褐色土層である。

第2層は10Y R $\frac{2}{2}$ にふい黄褐色粘質礫土層 (10Y R $\frac{2}{2}$ 明黄褐色礫層を含む) であり、第2トレンチ第11層と同層であり東南の斜面から流入された土層と思われる。

第3層は10Y R $\frac{2}{2}$ にふい黄褐色粘質礫土層 (10Y R $\frac{2}{2}$ 灰黄褐色土層を含む) であり第2層と同様に思われる。

第4層は10Y R $\frac{2}{2}$ 灰黄褐色砂質粘土層 (10Y R $\frac{2}{2}$ 明黄褐色土層を含む) であり、第3層に部分的に混入した層と考えられる。

第5層は10Y R $\frac{2}{2}$ にふい黄橙色砂質土層 (10Y R $\frac{2}{2}$ にふい黄褐色土層を少量含む) であり、第2層の土層が含まれていることからみて、東南側の斜面から流入し、岩盤直上層が混りあったものと思われる。

第6層は10Y R $\frac{2}{1}$ 灰白色砂質土層であり第8層上面に部分的に堆積した層と考えられる。

第7層から第10層にかけては岩盤直上あるいは岩盤の一部を形成している土層を示すものと考えられる。

第7層は10Y R $\frac{2}{2}$ 褐色砂質土層であり、第2トレンチの第9層・第10層とほぼ同様の土層と考えられる。

第8層は10Y R $\frac{2}{2}$ にふい黄橙色粘質砂土層である。

第9層は10Y R $\frac{2}{2}$ 灰黄褐色砂質土層であり、第2トレンチ第7層に対応する層と考えられる。

第10層は10Y R $\frac{2}{2}$ 灰黄褐色細粒砂質粘土層 (7.5Y R $\frac{2}{2}$ 褐色土層ブロックを含む) であり、第2トレンチ第14層に対応する層と考えられる。

第11層は10Y R $\frac{2}{2}$ にふい黄褐色小礫まじり砂質土層であり、第2層と同質の層が第2層以前に一部の凹地に堆積したものと思われる。

第12層は2.5Y $\frac{2}{2}$ 暗灰黄色砂土層であり、溜め池状遺構埋没後の上面に堆積した流入土と考えられる。

第13層から第15層は溜め池状遺構内に流入した埋土と思われる。

第13層は10Y R $\frac{2}{2}$ にふい黄橙色小礫まじり砂質土層、第14層は2.5Y $\frac{2}{2}$ オリーブ褐色細礫まじり砂土層、第15層は2.5Y $\frac{2}{2}$ 黄褐色細粒砂土層である。

第16層は2.5Y $\frac{2}{2}$ 黄褐色粘質砂土層である。

第17層は2.5Y $\frac{2}{2}$ 灰黄色粘質砂土層であり、溜め池状遺構の基底を形成している層と思われる。

以上第3トレンチについて述べてみたが、西端 (海側) は溜め池状遺構があり、土層が細かく分れるがそれ以外は山系傾斜面の流入土の堆積と考えてさしつかえないと思われる。

調査区西端 (海側) 土層図 (図 第4図)

第1層は2.5Y $\frac{2}{2}$ 暗オリーブ礫まじり砂質土層であり、いわゆる道路敷等に使用した土壌が堆積した

ものであると考えられる。

第2層は10Y R $\frac{3}{4}$ 黒色礫まじり粘質砂土層（腐葉土）であり、本来の表土層である。

第3層は10Y R $\frac{6}{4}$ にぶい黄橙色粘質土層である。部分的な堆積を示しており、他から流れこんだ土層と考えられる。

第4層は10Y R $\frac{3}{2}$ 黒褐色小礫まじり砂質土層であり、炭化物と灰をかなり含み土師器・須恵器の破片がみられる。

第5層は10Y R $\frac{4}{4}$ 褐色粘質礫層であり、堆積の厚い層である。

第6層は7.5Y $\frac{1}{4}$ 灰色粘質礫層であり、第5層によって切られた状態である。

第7層は5Y R $\frac{3}{2}$ 黒褐色粘質土層であり、微量ではあるが灰を含み須恵器片が出土している

第8層は10Y R $\frac{3}{4}$ 明黄褐色砂質粘土層であり、第1トレンチ第3層に対応できる層と考えられる。

第9層は10Y R $\frac{6}{2}$ 灰黄褐色砂質粘土層であり、弥生時代から古墳時代の土器片を含んでいる。

第10層は10Y R $\frac{5}{4}$ 褐灰色粘質炭化物混じり層の灰原土層であり、第9層とほぼよく似た遺物を含んでいる。

第11層は10Y R $\frac{6}{4}$ 明黄褐色大礫まじり粘質砂土層である。北の方向厚いことから北側からの流入土と考えられ、第1トレンチ第12層と土壌とほぼ同様と思われる。

第12層は10Y R $\frac{4}{4}$ 褐灰炭化物を多く含む粘質土層、いわゆる灰原土層であり弥生時代の遺物を多く含んでいた。

第13層は10Y R $\frac{5}{4}$ 褐灰礫まじり砂土層（10Y R $\frac{6}{4}$ 明黄褐色土層を20%程含む）であり、標高50cmより下層であり水分を多量に含み、干満によって水分の量が異なることからみて海水の影響を受ける層と考えられる。これより下層は海水の湧水により調査が困難な為終了した。

以上が調査区西端の土層セクションであるが、灰原層が3層にわたって確認された。

V 遺構（図 第5～11図）

遺構としては、井戸跡、溜め池状遺構、土器溜り遺構・土壇状遺構・集石遺構・灰原遺構が検出された。以下各遺構ごとに述べる。

1 井戸跡（図 第11図・図版6）

調査区のほぼ中央に位置し、地形測量図で見てもわかるように標高1m前後の大きく凹んだ状態であり、調査当初は攪乱箇所と扱っていたが、第1トレンチの調査の際に第13層を切りこんだ形で確認された。東西径4.24m、南北径4.5mの不整形プランを呈しなだらかに中央に向って傾斜し、中央部ではほぼ直角に近く2段に落ちこんでいる。2段目の掘りこみは、東西長1.5m、南北長1.1mの隅丸長方形を呈している。深さについては、湧水と青灰色グライ粘質土層で非常にねばく、又人命の危険性を考慮して途中で作業を終了した為不明である。

なお遺構内の土層については、何回かの台風接近に伴う豪雨によって土層セクション用壁が崩落し作図が不可能であった。

覆土中に人頭大の円礫、角礫が多量に含まれていることからみて、使用していた時は壁面は石垣を組

んでいたものと想定される。

1段目の落ち込みはなだらかに中央に向って傾斜し、2段目の落ち込みの回りをほぼ均等の距離でテラス状を呈していることからみて、井戸の外側の作業場としての機能を持っていた場所と考えられる。なお他の井戸跡などから比較すると、やはり石敷等の整形がなされていたものと思われる。

時期については、表土下1.5m附近で近世磁器片が出土したことから江戸時代末期より以前と想定できるのである。

2 溜池状遺構（図 第6図・図版1）

調査区南端のほぼ中央に位置し、約1m西側からは建物跡コンクリートによって調査が不可能な場所となっている第3トレンチ調査の際に検出され、はじめは自然傾斜の落ちこみ、あるいは攪乱層でないかと考えていた。精査の結果、第3層を切りこんだ形で第3トレンチ内ではほぼ確定でき遺構と判断した。

南側は調査区の排土の関係から調査が不可能であった。規模は東西径3.1m、南北径推定3.2m、深さ0.6m程の不整形円形プランで断面はやや傾斜し底は皿状を呈している。覆土は、第3層のにぶい黄褐色粘質礫土層及び第10層の灰黄褐色細粒砂質粘土層を切りこんだ形で確認され、第1層はにぶい黄橙色小礫まじり砂土層が堆積し、その下に東側から流入したと思われるオリーブ褐色砂土層が堆積し、西側より黄褐色砂土層が堆積している。溜め池状遺構廃棄後の最初の土層としては、灰黄色粘質砂土層が堆積土層である。この堆積土層からみると、溜め池状遺構は、やや西へ向って傾斜した粘質土層を円形に切りこみ東側山系の天水をためて使用したものと思われる。なお遺物を全く伴っていないため時期は不明である。

3 土器だまり遺構（図 第7図・図版8）

当初第1トレンチ南西に近い所で第15層の暗褐色粘質土層内より土器片が確認され、全面発掘によって長軸110cm、短軸90cmの楕円形に広がりをもった遺構である。

土器を取り除いた後、約1.4mの不整形円形プランの土壇状遺構（SK-02）より約15cm程の覆土をはさんで上面に被覆した形で出土している。

大きさ1cmから10cmの約170片の土器片が、土器面の表裏は関係なくほぼ水平に約10cm程の厚さで堆積し、特に西半分すなわち海側の出土状態の密度がこく、東から西へ堆積状態がやや傾斜し厚くなっている。土器片の直上で約20個程の円礫が、中央部よりはやや北西にずれ、しかし主軸とは直行し意図的に置かれた状態で出土している。

この土器片の出土状態からみると、埋没以前にすでに壊れた状態（意図的に破碎して置いたかどうかは別として）で出土しているのである。土器片の間からは炭化物が少量混っていたようである。

時期については、遺物の項で詳細は述べるが一応弥生時代後期後半の段階（畿内第V様式新段階）と述べておきたい。

なお土壇内の覆土は、第1層が5YR $\frac{1}{2}$ 灰色粘質土層であり砂礫と炭化物を含んだ層が堆積し、第2層は2.5YR $\frac{1}{2}$ 暗灰黄色粘質土層(10YR $\frac{3}{4}$ 暗褐色砂質土層を少量含む)であり、やや礫まじり層である。第3層は土壇底面の直上層であり、10YR $\frac{3}{4}$ 暗褐色砂質土層で焼土及び炭化物を含んだ層であり、2層・3層は皿状堆積となっている。

4 土壌状遺構 (図 第8～10図・図版2～5)

調査区域内で8ヵ所の遺構(うちSK-02は土器だまり遺構の項で述べた。)が検出された。後で述べる集石遺構と同じ高さあるいは集石遺構の基底部分、及び集石遺構より下の層で検出された。以下検出した順にSK-01～SK-08と名付けた。

SK-01 (図 第8図)は、井戸状遺構の北西側に接するように確認され、長軸1.4m、短軸1m、深さ約10cmの卵形楕円形を呈している。東側は土壌のプランが十分につかみきれなかったため推定である。覆土は5YR $\frac{5}{2}$ 灰色粘質土層であり炭化物を少量含んでいる。時期については、遺物、層序的に不安定であり、今後の検討を要する為ここでは省略する。

SK-03 (図 第8図)は、SK-08と一部重複し、SK-08を切った形で確認され、東側でSK-04とわずか10cm程離れた形で検出された。長軸1.35m、短軸0.83m、深さ8cmの楕円形を呈する。土層は2層にわかれ、第1層は2.5Y $\frac{5}{2}$ 暗灰黄色粘質小礫まじり層(10YR $\frac{3}{4}$ 暗褐色砂質土層を含む)であり、土壌の中央部に堆積している層である。第2層は土壌壁面に堆積したものであり、5YR $\frac{5}{2}$ 灰色粘質小礫まじり土層(10YR $\frac{3}{4}$ 暗褐色砂質土層を含む)である。第1層より弥生後期後半と思われる土器片が出土している。また土壌床面より有孔円版土製品が出土している。

SK-04 (図 第9図)は、SK-03のすぐ東側に接しプランが不明瞭であった為全容はわからないが、径約1.2mの円形プランであると推定される。深さについては集石遺構との重なりから十分つかめなかったが、約2～6cm程と推定される。

SK-05 (図 第9図)は、SK-06と接するように集石遺構の下層で検出されたものであり、側壁の一部が不明瞭であるので確定できないが、長軸1.65m、短軸最大幅0.57m、最小幅0.31m、深さ9cmの台形状プランを呈している。土壌上面及び覆土内より約15片程の土器片が出土している。覆土は第1層が10YR $\frac{5}{2}$ 褐灰色砂質土層(7.5YR $\frac{5}{2}$ 明褐色砂質土層が若干混じる)である。第2層は7.5YR $\frac{5}{2}$ 明褐色砂質土層(10YR $\frac{5}{2}$ 褐色砂質土層が若干混じる)であり、いずれも少量の炭化物を含んでいるようである。

SK-06 (図 第9図)はSK-05のすぐ南に接し、SK-05と主軸に並行して長軸2m、短軸最大幅1m、最小幅0.55m、深さ10cmで変形楕円形プランを呈する。SK-05と同じく20数片の土器片が覆土中より検出されている。土壌内の土層は安定していないが一応2層にわかれるようである。第1層は10YR $\frac{5}{2}$ 褐灰色砂質土層(7.5YR 明褐色砂質土層が若干混じる)の遺物包含層である。第2層は土壌側面及び底面直上の層であり、10YR $\frac{5}{2}$ 褐灰色砂質土層を基本として7.5YR $\frac{5}{2}$ 明褐色砂質土層が第1層より多い層である。

SK-07 (図 第10図)はSK-05、SK-06より約40cm程東側で検出されたもので、東側のプランを十分確認できていないが、長軸2.38m、短軸1.3m、深さ10cmの不整楕円形プランを呈している。土壌内より約5片の土器片と凹基式石鏃1点が出土している。覆土は10YR $\frac{5}{2}$ 褐灰色砂質小礫・焼石まじり土層(7.5YR $\frac{5}{2}$ 明褐色砂質土層を40%含む)である。土壌内のやや側壁よりの基底部に焼石が若干見られるようである。

SK-08 (図 第10図)は、SK-03の下で検出されたもので長軸1.9m、短軸1.1m、深さ30cmの楕円形プランを呈している。覆土上層部で約3片の土器片が出土している。覆土は第1層が10YR $\frac{5}{2}$ 褐

色砂質炭化物を少量含む土層(7.5Y R 5/6 明褐色砂質亜礫まじり土層を少量混じる)である。第2層は土壌底面直上の層であり、7.5Y R 5/6 明褐色砂質土層と10Y R 5/6 褐灰色砂質土層の混合層である。

5 集石遺構 (図 第11図・図版6, 7)

調査区中央の井戸状遺構附近から西側(すなわち海岸線より)において海岸の方へ地形の傾斜と同じく傾斜した状態で確認された。最初は上層の山系からの流れこみの自然石と区別がつかず自然堆積によるものか海岸線に近く、しかも標高が1m前後であることから旧海岸線でないかと考えていたが、集石の中には焼石が混ざり、焼土がある程度固まって出た所や、集石の間に焼土・炭化物が混入し、土器片を含んでいることから人工的なものと判断した。

集石はこの海岸線や、山系が風化して堆積した近くの石を持ってきたもので、直径2~40cmぐらいの和泉砂岩の亜角礫・亜礫を厚さ10~30cm程に西側(海岸)へ向ってゆるやかに傾斜し堆積したものである。集石下層の自然堆積層にも同様の亜礫、亜円礫を含んだ層であるので見分けが付きにくい状態であり一応小礫まじりの層が切れ炭化物が切れる段階で判断したものである。

西側へ行くほど堆積が薄くなり、集石状況が雑然とした堆積であり、後述する灰原遺構の堆積が顕著となるのである。集石状況はいくつかのブロック状に堆積されていると考えられ、堆積密度に濃淡がありうる一時期に1度に形成されたものではなく、幾度かの集石ブロックが複合して形成されたものと考えられる。この集石遺構の堆積状態については、詳細な検討が必要であり、本報告の際に述べることとし今回は省略する。

6 灰原遺構 (図 第11図)

集石遺構の西半分と重複するように検出され、海岸線との間にある調査境の道路敷まで確認されており、本来は傾斜しながら道路の下まで入っているようであり西側の範囲は不明である。なお南側はコンクリート建物によって壊され、北側も戦時中の攪乱によって不明である。

この灰原遺構は集石遺構の切れるところから次第に厚く何層かにわたって堆積している。道路敷境の土層図(図版第4図)からみると、第7層の5Y R 5/6 黒褐色粘質土層、第10層の10Y R 5/6 褐灰色粘質土層、第12層の10Y R 5/6 褐灰色炭化物混り粘質土層において3層の3段階層にわたってみられるのである。この第7層、第10層、第12層には弥生時代後期後半(畿内第V様式新段階)の遺物がブロック状に堆積して出土している。出土遺物や灰原堆積状態からみると、集石遺構・土壌状遺構と相関関係を持ち、これらの遺構を1つのセットとしてとらえて遺構の性格等を考えていく必要があると思われる。

VI 遺 物

11月の突風は小鳴門橋から亀浦港に通じる主要地方道鳴門公園線を、紀伊水道に面した千鳥ヶ浜や大毛海岸の浜砂を巻き込んで短時間のうちに埋め尽くそうとする。付近の民家はこの期間雨戸を閉ざしている。砂は更に西方、大毛島の山々の山裾に吹き溜まり莫大な量の堆積作用をなしてきた。

大毛島22・23両区はこの強風の直撃を避けるがごとくその山々の反対側の麓、すなわち波静かな「内ノ海」のほとりにある。地元では22区は通称「馬ノ口」と呼ばれており、寛永6(1629)年、大毛島内

に蜂須賀藩の馬の放牧場が開営された事と関連するものと考えられ、この方面の遺構、遺物についても特に配慮した。

今回報告する22・23両区は、昭和52年度の分布調査では共に「海岸線に沿った所に平坦地がある」という理由により、遺跡ランクは「II」とし遺物は採集しえなかった地区である。

さて、大毛島一帯の汀線周辺には浮岩（PUMICE）、いわゆる“軽石”や、コークスに似た火山礫（LAPILLI）等の火山岩がかなり多量に散在する事は注意を要し、22区に於いては遺構のかなり底まで混入しており、一部は集石遺構内に伴い2次火熱を受けて赤く焼けている。この火山岩は解礫状や円礫を受けたものも見受けられる（図版6、7）。

小林勝美氏は昭和53年度に行なわれた当「本四架橋」関連第6区（瓶浦神社地区）の発掘調査等に於いてこの火山岩の散在に注意され、徳島大学の阿子島功氏に鑑定御教示を受けられており、今回昭和57年度の同大学の中川衷三氏による鑑定御教示等に基づきこの火山岩について少々概略として触れておきたい。

地質時代の第四紀、およそ15万年前から始まる後期更新世。文化階梯では中・後期旧石器文化の時代であるが、鹿児島県始良町森山にある始良カルデラの火山活動の噴出物（始良Tn火山灰）……略称“A T、……は古い方から「大隅降下軽石」「妻屋火砕流」「亀割坂角礫層」「入戸（いと）火砕流」があり、現在までに判明しているA Tの陸上における分布域は北海道や東北地方北部を除く本州・四国・九州のほぼ全域に達し最遠方地域では火口からの距離は実に1,200kmに達する世界的にも第一級火山灰である。

阿子島氏より東京都立大学の町田洋氏に依頼された大毛島6区（瓶浦神社地区）の軽石についての検鏡及び群馬大学の新井房夫氏による屈折率測定の結果では入戸火砕流の軽石であることが確実とされ、その他の資料中にも大隅降下軽石～入戸火砕流の軽石にあたるものが含まれるとされる。又円磨を受けているものは恐らく海流により漂着してきた可能性があるとも指摘されている。

今回22・23両区の火山岩の一部鑑定の結果も九州方面からの漂着である事が確実となされてより詳しい鑑定が望まれる。

1 出土遺物所見

出土遺物は各遺構等について(1)攪乱層内 (2)土器溜り一括 (3)灰原内 (4)集石内 (5)集石下層の5項に整理分類して述べておく。又各遺構の石器等は別に(6)として示す。

(1) 攪乱層内 (図 第12図・図版13)

① 近世磁器碗。口径約11.0cm。高台底径4.4cm。器高5.9cm。素地は精良緻密で白色。焼成は良好で薄青い透明釉を全体にムラなく施す。釉切れは畳付のみ。内面見込みには青藍色の呉須により飛翔する鶴1羽。側面には大根？外面体部にはやはり飛翔する鶴2羽と大根？2本がモチーフされている。全体に薄手に作製された軽快端正なものである。碗の出自は検討中。

② 近世磁器碗。伊万里系。復元口径約12.2cm。高台底径約5.6cm。器高約6.0cm。素地は精良緻密で灰白色。薄青い透明釉を全体に施すが内面見込み中内よりややずれて淡い青藍色の呉須によるデフォルメされた五葉がモチーフされており、その周辺丸く幅1.5cm前後は釉切れ露体となって重ね焼の証を示す。更にその回りに2条の圏線を施す。外面体部にはロクロによる微弱なクシ目が5条程回っており中央付近にシンプルな禾本科植物？の草葉がモチーフされる。高台とそのワキには計3条の圏線を施し、やや楕円形の高台は窯割れが大小8箇所程度認められ、畳付は釉切れとなる底部中心を厚手に作製された磁

器である。

③ 近世磁器小皿。伊万里系。高台復元底径約3.9cm。素地は精良緻密であるが芯は灰色、外面近くは薄茶色とサンドイッチ状を呈する。内面見込み中央に濃い藍色の呉須により五葉がモチーフされ、回りに2条の圈線を施す。内面全体は淡いピンク色に発色しており、外面については高台内以外は浅黄色に発色し、高台内は釉薬が浅黄色と白色の霜降り状を呈し、その中央には角囲いにデフォルメされた「福」字らしきものがモチーフされる。畳付は釉切れ露体となる。

井戸状遺構内の腐葉土攪乱層中より出土している。

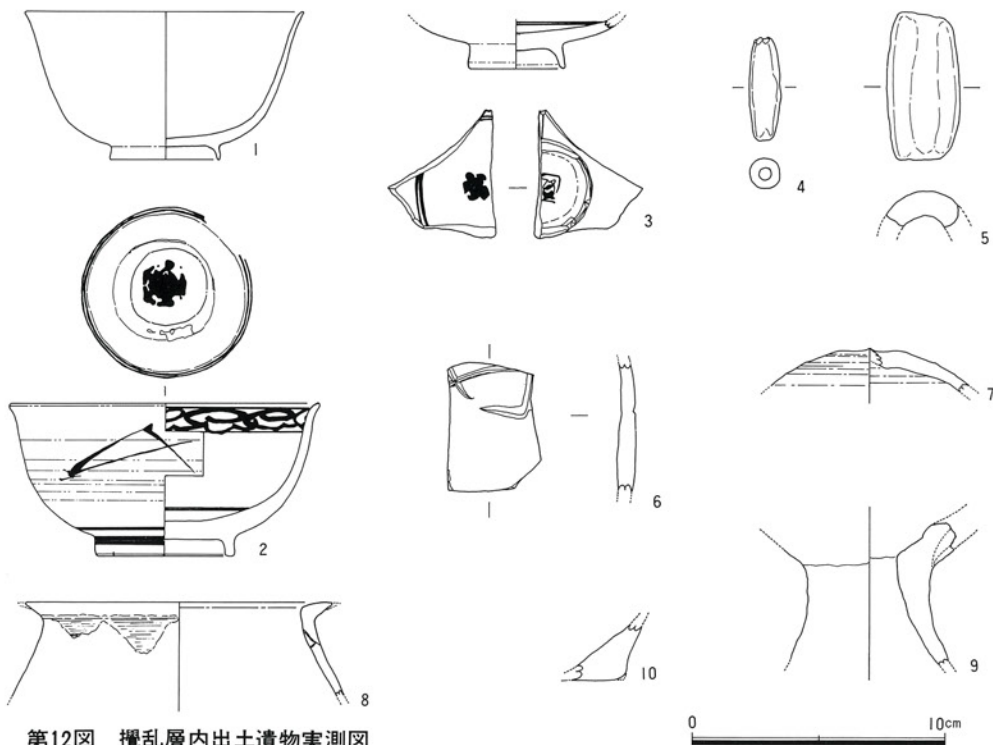
④ 近世陶質錘。完形品。管状単孔式。全長4.1cm。外直径最大約1.3cm。孔直径約0.5cm。胎土は精良で焼成は良好。褐色釉を施し手捏により作製される。

⑤ 近世陶質錘。管状単孔式。現存長約5.8cm。胎土はやや荒く砂粒を多く含み焼成は良好。磨滅を受けており外面の釉薬は欠落しているが孔内面に褐色釉が残存する。手捏により作製される。

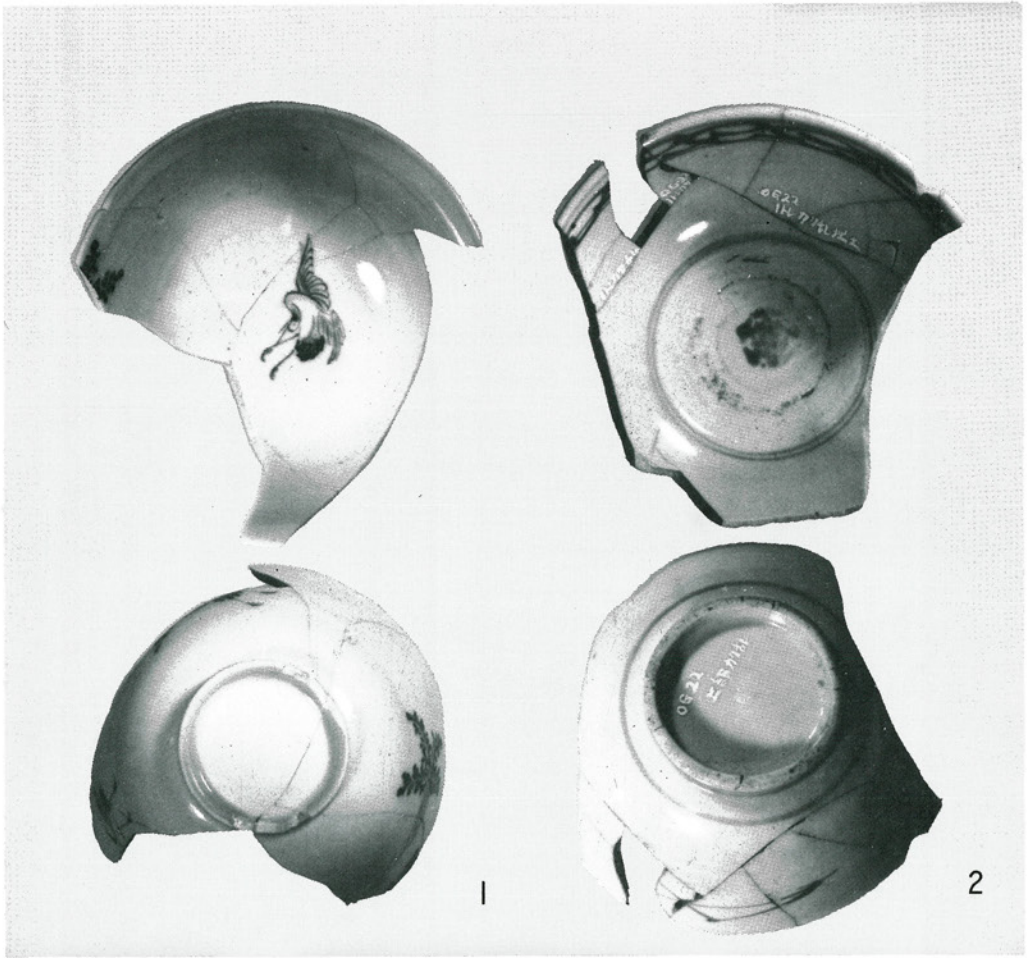
⑥ 近世陶器徳利。大谷系。胎土は精良で中央から内面は赤茶色。外面へ向かって褐色に発色し、外器面には褐色釉を施す。更に外器面には先端がV字形の鋭いへら状工具により伸びのある文字を刻む。

⑦ 須恵器。蓋。胎土に砂粒を多く含み焼成は良好である。全体に白灰色に発色している。器面は磨滅をかなり受け荒れている。

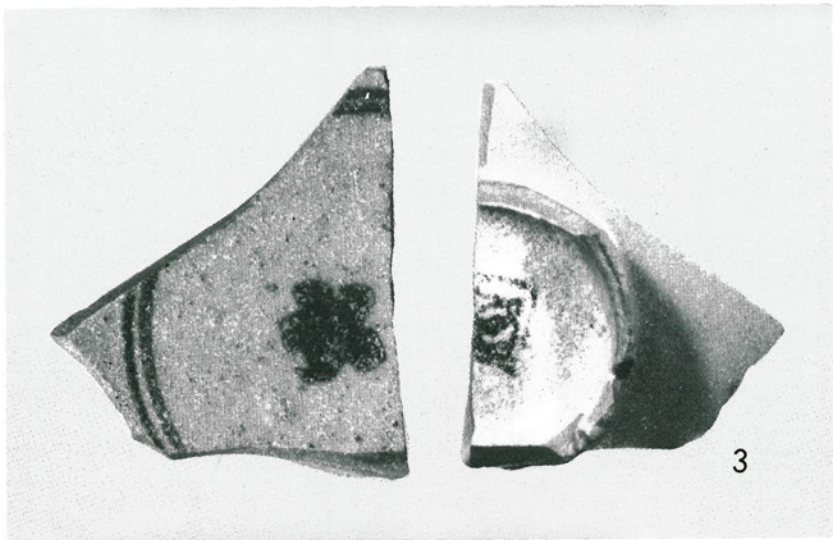
⑧ 土師質土器。甕形土器。復元口径約12.1cm。全体に器面の剥落が著しい。胎土は精良で砂粒が少なく焼成は良好。器面の内外は淡い茶色に発色するが胎土内面は茶褐色を呈している。器面にはキメ細かな土をかけており内外面共へラミガキではないかと思われる。内傾する頸部から逆L字形に外反し平らな口縁に続く。口縁部は若干水平方向へ伸びる可能性がある。



第12図 攪乱層内出土遺物実測図



図版12 攪乱層内出土遺物(約 $\frac{1}{2}$)



図版13 攪乱層内出土遺物 (約 $\frac{1}{2}$)

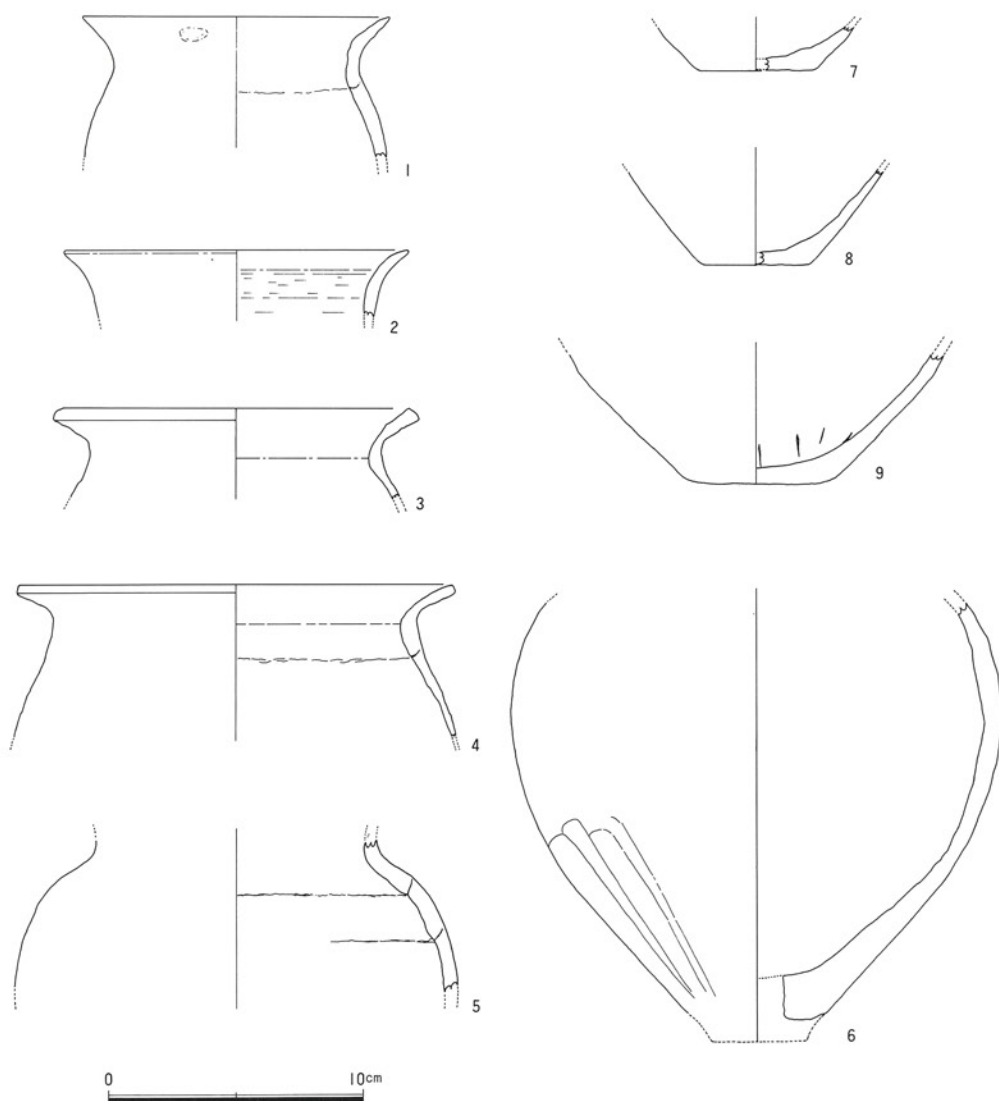
⑨ 弥生土器。高坏形土器。全体に器面の剥落が著しく調整は不明。胎土はキメ細かく白っぽい砂粒を若干含み焼成は良好。全体に赤茶色に発色する。成形技法は坏部の底に円板充填を施すものと考えられる。

⑩ 弥生土器。底部。胎土はやや荒く1～4mm程度の緑色片岩の細片及び白っぽい細砂粒を含む。焼成は良好で内外面は淡い薄茶色に発色し、胎土断面は淡い赤茶色に発色する。調整は磨滅を受けており不明。

以上が攪乱層中の復元図化できた資料であるが、図化に及ばなかったが小片で数個体分の弥生土器片須恵器片。近世陶磁器片があり、他に相当量の火山岩がある。なお石器石材類は(6)に示す。

(2) 土器溜り一括 (図 第13図・図版15, 16)

土器溜りの遺物は弥生土器と土器の間に挟まれて1片のサヌカイト剥片(6)―④Hが出土しているが土



第13図 土器だまり一括遺物実測図

器の殆どが風化により器面の傷みが激しく調整等が明確なものは稀である。そのため特に確定的な事はいえないが、ほぼ畿内第Ⅴ様式の範囲で捉えられるものではないかと思われる。

① 甕形土器。復元口径約12.2cm。胎土はキメ細かく白雲母、石英等砂粒を若干含み焼成は良好。内面は口唇部までほぼ全体に黒灰色に変色し外面は淡い白茶色に発色する。内面に粘土紐接合面が認められ、外面口縁部に指頭圧痕が認められる。調整は不明。胴部からゆるやかに外反する口縁をもち口唇部は薄く尖らせておわる。

② 口縁部。復元口径約13.6cm。胎土はやや荒く雲母、石英等小砂粒を若干含み焼成は良好である。全体に淡い赤茶色に発色する。内面は口唇部より1.0cm程度下まで右方向のヘラケズリを施す。他の調整は不明。外反する口縁は口唇部を尖らせ気味におわる。

③ 甕形土器。復元口径約14.4cm。胎土はキメ細かく石英、赤色斑粒を若干含み焼成は良好。全体に黄茶色に発色する。調整等は不明。内傾する上胴部から外反する口縁は端部を若干肥厚させ、口唇部は面取りされ角をもつ。

④ 甕形土器。復元口径約17.2cm。胎土はキメ細かく石英粒、1.0cm程度の緑色片岩片等を若干含み焼成は良好。全体に風化が著しいが現状では明赤茶色と白灰色に発色する。調整は不明確ながら内面の段差はヨコ方向のヘラケズリか。内面には粘土紐接合面が認められる。内傾する上胴部から外反する口縁は若干肥厚しながら口唇部を丸く収めている。

⑤ 上胴部。復元頸部基径約11.5cm。胎土はやや荒く雲母、石英、赤色斑粒等砂粒を若干含み焼成はやや不良。胎土断面中央付近より内面全体は黒灰色に変色し、外面は淡い赤茶色に発色する。外面には一部黒斑がみられる。内外面共調整は不明。内面には胴部と頸部の粘土接合面が顕著に認められる。

⑥ 甕形土器。胎土はキメ細かく白雲母、石英、チャート等細砂粒を若干含み焼成は甘い。内面は全面にわたり黝黒色であり外面は青灰茶色に発色する。外面底部付近より胴部にかけては広範囲に黒斑がある。外面は微弱ながら胴下半をタテヘラケズリを施した後に不完全にスリケシを行う。内面調整は不明であるが粘土紐接合面を顕著に認める。底部は粘土接合面から欠損している。

⑦ 底部。復元底径約4.5cm。器面の磨減が著しい。胎土はやや荒く石英、赤色斑粒を若干含み焼成は良好。現状で内面は赤茶色、外面の底部付近は淡い薄茶色に発色し、胴部は煤らしきもので灰茶色に変色している。調整は不明。平底。

⑧ 底部。復元底径約4.2cm。器面の磨減が著しい。胎土はやや荒く石英、赤色斑粒を若干含み焼成は良好。現状で内面は淡い赤茶色、外面は薄茶色に発色する。調整は不明。平底。

⑨ 底部。復元底径約5.5cm。胎土はやや荒く大は5mmからの石英、緑色片岩の粒を若干含み焼成はやや甘い。内面は灰茶色に発色し胴部に黒変が認められる。外面は底部を含めて全体に黒変しており調整は内面にタテ方向のヘラケズリが施され外面は全体にケズリないしミガキの痕跡を留める。

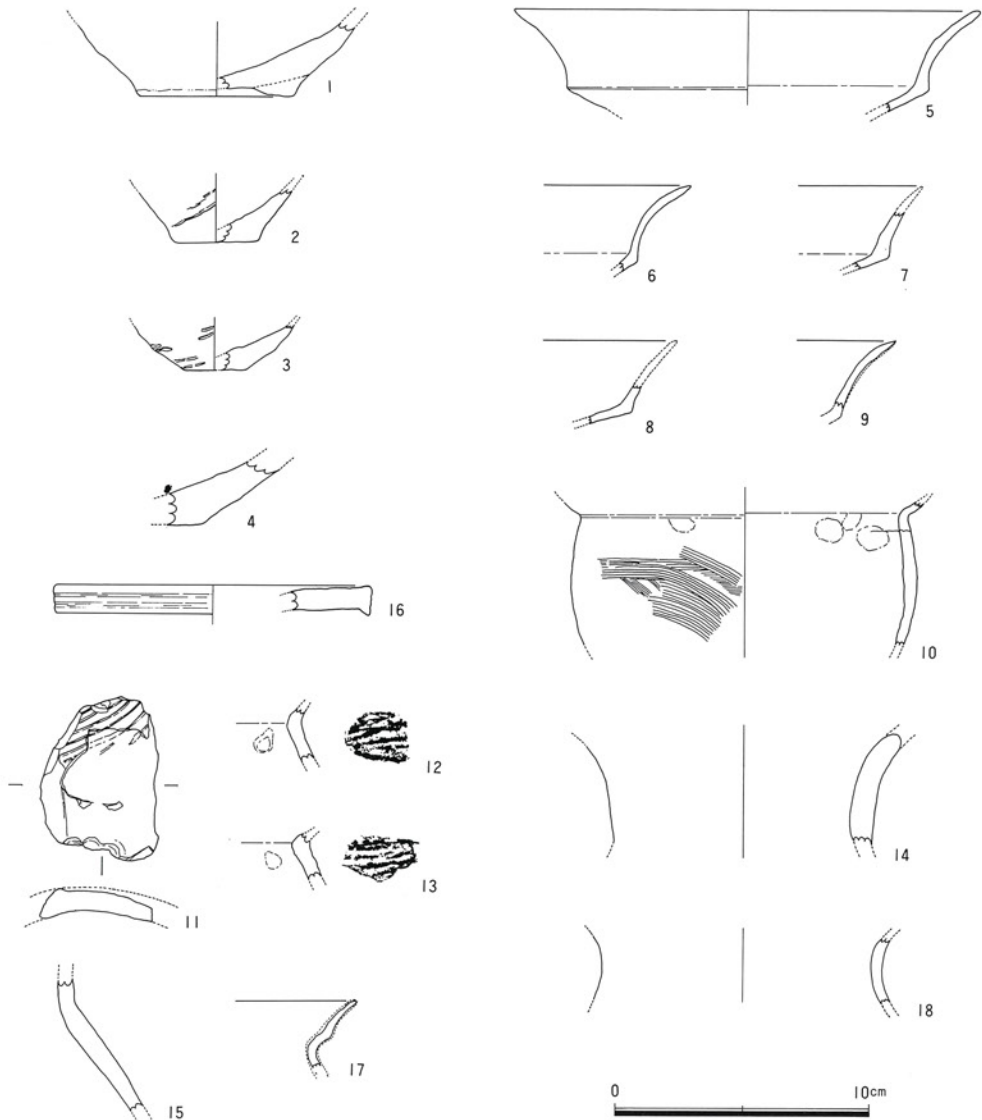
(3) 灰原内 (図 第11図・図版17, 18)

灰原内出土遺物は総て弥生土器で、ほぼ畿内第Ⅴ様式の新段階に包摂されうものと考えられる。

遺構が湿地であった部分もあり土器の保存状態は極めて悪く調整等が明確なものが稀である。

① 底部。復元底径約6.2cm。胎土は荒く8mm内外の石英粒や白雲母、黒雲母等砂粒を多量に含み焼成は良好であり黒褐色ないし茶褐色に発色する。調整は不明。底部は粘土紐ハリツケ。

② 底部。復元底径約3.5cm。胎土はやや荒く雲母等砂粒を若干含み焼成は良好。全体に淡い赤茶色に発



第14図 灰原内出土遺物実測図

色する。外面にごく僅か右上がりの平行タタキの痕跡を留める。

- ③ 底部。復元底径約2.4cm。胎土はやや荒く白っぽい砂粒を若干含み焼成は良好。全体に灰茶色に発色し、底部付近のみ赤茶色に発色する。調整は不明。外面にごく僅か右上がりの平行タタキの痕跡を留める。
- ④ 底部。胎土は荒く3～4mm程度の石英粒を多量に含み焼成は良好。調整は不明。外面は淡い黄茶色。胎土中心より内面へ向かって赤橙色に発色する。二次火熱を受けたためか外面に小さなヒビ割れが多数生じている。
- ⑤ 高坏形土器。復元口径約18.5cm。胎土はやや荒く白雲母、石英等砂粒を若干含み焼成は良好。胎土断面は淡い赤茶色。内外面は淡い茶色に発色する。調整は内面にヨコ方向のヘラミガキを施す。外面は不明。外反する口縁は端部を尖らせておわる。

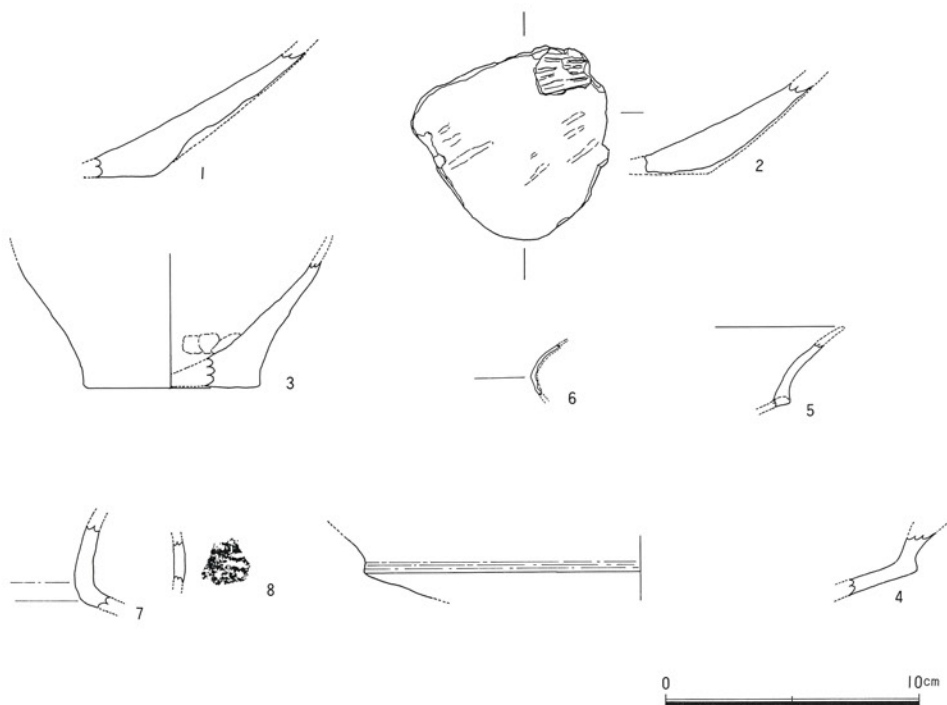
- ⑥ 高環形土器。胎土はやや荒く白雲母，石英等砂粒を若干含み焼成は良好。全体に淡い赤橙色に発色し，外面体部に黒斑があり内面口縁部にも小豆大の黒褐色斑がみられる。調整は不明。外反する口縁は端部を尖らせておわる。
- ⑦ 高環形土器。胎土はやや荒く白雲母，石英等砂粒を若干含み焼成は良好。外面は淡い茶褐色に，内面は赤橙色に発色する。調整は内面にヘラミガキの痕跡を僅かに留める。外反する口縁は端部を尖らせておわると思われる。
- ⑧ 高環形土器。胎土はやや荒く白雲母，石英等砂粒を若干含み焼成は良好。外面全体に黒斑がみられ内面は淡い赤茶色に発色する。調整は内面にヨコ方向のヘラミガキを施す。外面は不明。外反する口縁は端部を尖らせておわると思われる。
- ⑨ 高環形土器。器面の剥落が著しく器厚は実測図若干厚くなる。胎土はやや荒く白雲母，石英，チャート等砂粒を若干含み焼成は良好。現状では全体に淡い赤茶色に発色している。調整は不明。外反する口縁は端部を尖らせておわる。
- ⑩ 甕形土器。復元頸部径約13.0cm。胎土はキメ細かく白雲母，石英等砂粒を若干含み焼成は良好。全体に淡い白茶色に発色し外面頸部以下の大半は黒斑がある。調整は外面にヨコ及び右下がりのハケ調整を加えた後，一部を不完全なスリケシを行なう。外面の一部と内面頸部付近に指頭圧痕を留める。丸い胴部から「く」の字状に外反する口縁をもつ。
- ⑪ 上胴部。胎土はやや荒く白雲母，石英等白っぽい微小砂粒を若干含み焼成は良好で全体に淡い赤橙色ないし赤茶色に発色する。内面には直径1.5cm程度の丸い褐色斑がある。調整は不明。外面にごく僅か幅3mm程度の右上がりの平行タタキの痕跡を留める。
- ⑫ 頸部。胎土はやや荒く雲母，石英等白っぽい微小砂粒を若干含み焼成は良好。外面は淡い赤茶色，内面は淡い赤橙色に発色する。内面に指頭圧痕があり外面は幅3mm程度の右上がりの平行タタキを施した後一部ヘラ状工具で不完全にスリ消す。
- ⑬ 頸部。胎土はやや荒く雲母，石英等白っぽい微小砂粒を若干含み焼成は良好。外面は淡い薄茶色に発色し，内面は頸部以上が淡い赤橙色，以下が淡い黄茶色に発色する。内面に指頭圧痕があり，外面は幅4mm程度の右上がりの平行タタキを施した後一部ヘラ状工具で不完全にスリ消す。
- ⑭ 壺形土器。頸部。胎土はやや荒く白雲母，石英，緑色片岩系の砂粒を若干含み焼成はやや甘い。全体に磨滅しており現状では淡い茶色ないし赤茶色に発色している。調整は不明。上部端は粘土紐接合面。
- ⑮ 壺形土器。上胴部。胎土はやや荒く白雲母粒，4mm角の石英粒等を若干含み焼成はやや甘い。磨滅により調整は不明。現状では淡い茶褐色ないし赤茶色に発色している。
- ⑯ 壺形土器。口縁部。復元口径約12.6cm。胎土はやや荒く石英等砂粒を若干含み焼成はやや甘い。内面は淡い黄茶色，口唇部及び外面は赤茶色ないし茶褐色に発色する。口縁端部を下方へ若干断面三角形形状に拡張し，口唇部には2条の擬凹線を巡らせている。
- ⑰ 口縁部。保存状態が悪く磨滅が著しい。器厚は1mm内外全体的に厚くなる。胎土はやや荒く4mm程度の石英粒や赤色斑粒，緑色片岩等を若干含み焼成は良好。現状では白っぽい肌色に発色する。頸部より外反する口縁は外方へ軽いカーブを描きながら口唇部を薄く尖らせ気味におわる。
- ⑱ 頸部。胎土はやや荒く雲母，石英等微小砂粒を若干含み焼成は良好。全体に淡い赤茶色に発色，調整は不明。

以上が灰原内出土器の復元図化できた資料であるが、図化に及ばなかった破片も量にしてみればかなりあるが、個体別では殆どの破片が図面内土器のどこかに接合すると考えられ、個体数はほぼ図面数に近い。

(4) 集石内 (図 第15図・図版19)

集石内出土遺物は弥生土器と(6)に示す石鏃、石斧がある。集石内の層位は分層が困難であった。土器はほぼ畿内第Ⅴ様式の範囲で捉えられるものと思われる。

- ① 底部。胎土は荒く白雲母、石英等微小砂粒を若干含み焼成は良好。内面は淡い黄茶色ないし赤茶色に発色し、外面は黄茶色に発色する。胎土断面は黒灰色である。器面の剥落が著しく調整等は不明。平底。
- ② 底部。胎土は荒く白雲母、石英等微小砂粒、1.5mm程度のチャート粒を若干含み焼成は良好。内面は淡い赤橙色ないし黄茶色等に発色し、外面は黄土色ないし黄茶色に発色する。器面の剥落が著しく調整は不明。外面に平行タタキの痕跡を留める。平底。
- ③ 底部。底径7.0mm。胎土は荒く大は7mm角程度の石英粒を多量に含み雲母、赤色斑粒も多く認められる。内面は淡い薄茶色に、外面は淡い茶褐色に発色する。器面の剥落が著しく調整は不明。内面底部に指頭圧痕を数個留める。平底。
- ④ 高环形土器。胎土は荒く石英粒を多量に含み白雲母や黒色結晶粒を若干混入。焼成は良好で全体に赤茶色に発色する。胎土の荒さのためにもろく分解が著しい。内外面共ヘラミガキで器面を整えていた痕跡がある。大きく外反する口縁である。
- ⑤ 高环形土器。胎土はやや荒く白雲母の微小粒を若干含み焼成は良好。内面は淡い赤茶色に発色し外



第15図 集石内出土遺物実測図

面は茶褐色に発色する。体部は黒変する。調整は不明。外反する口縁は端部を尖らせておわると思われる。

⑥ 頸部。胎土はやや荒く4mm程度の石英粒を含み焼成は良好。器面の剥落が著しいが現状で赤褐色に発色する。外面はヘラミガキを施す。内面調整は不明。

⑦ 壺形土器。頸部。胎土はやや荒く白雲母の微粒を若干含み焼成は良好。胎土断面中程より内面全体は黒色に変色し、外面は淡い黄茶色に発色する。調整は不明。

⑧ 胴部。胎土はやや荒く白雲母の微粒子を若干含み焼成は良好。内面は赤橙色に、外面は淡い赤茶色に発色する。外面に平行タタキを施す。

(5) 集石下層 (図 第16図・図版20)

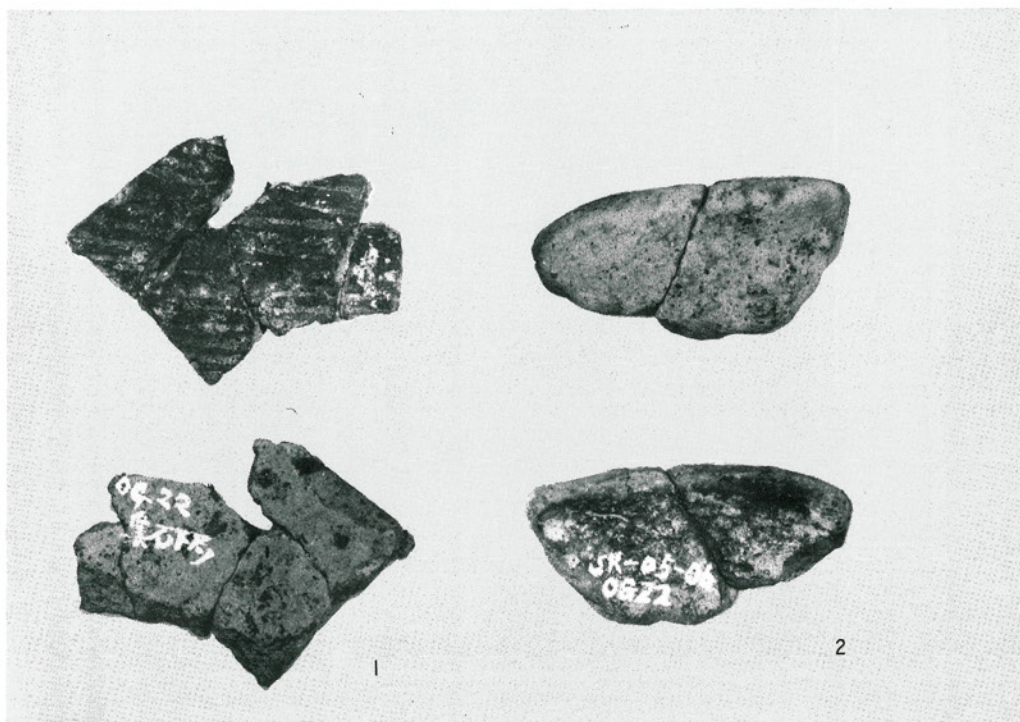
① 胴部。胎土はやや荒く黒っぽい砂粒を多く含み焼成は良好で胎土及び内面は淡い茶色に発色し、外面全体は黒褐色に発色する。内面はヨコ方向のヘラケズリを施し、外面は幅1mm内外の平行タタキを施した後ヘラ状工具で全体を不完全にスリ消している。

② 口縁部。胎土はやや荒く赤っぽい砂粒を多く含み焼成は良好。内面は黒褐色に発色し胎土及び外面は淡い肌色に発色する。内面はヨコ方向のヘラミガキを施し外面調整は不明。口縁端部を断面三角形に拡張しつまみ上げている。

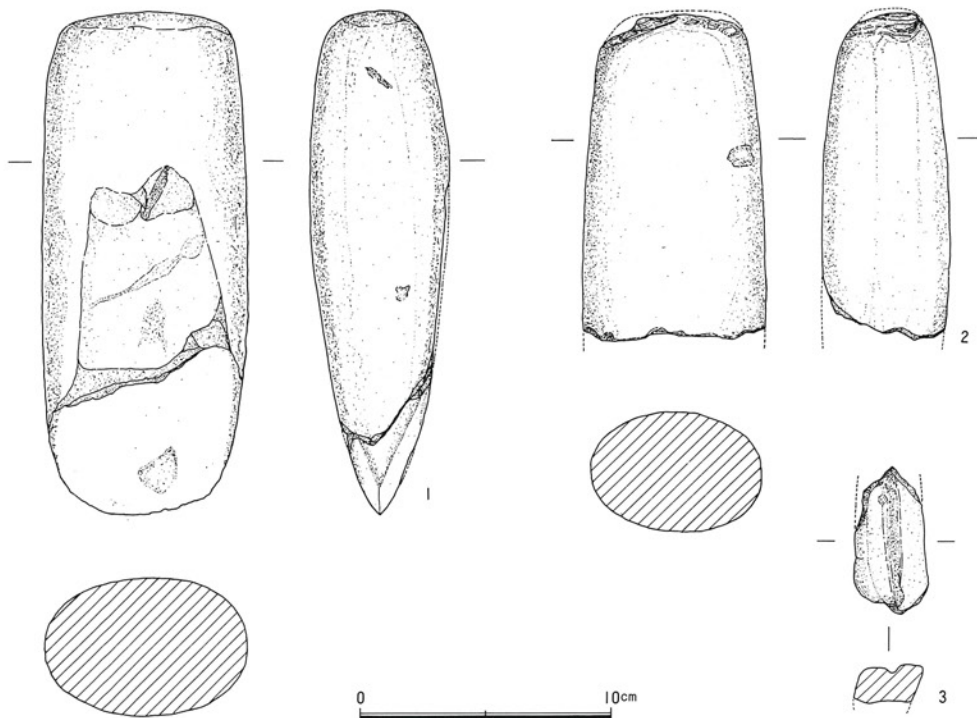
以上が集石下層の土器である。特徴あるものはこの2点しかなく、他は小片が少量である。



第16図
集石下層出土遺物実測図



図版20 集石下層出土遺物



第17図 太型蛤刃石斧・有溝礫実測図

(6) 石 器

① 太型蛤刃石斧 (図 第17図・図版21)

- ・全長20.2cm。断面部分幅8.0cm。同厚さ5.6cm。現存重量1.58kg。
- ・石材 (中川衷三氏鑑定)

変斑礫岩 (MetaGabbro)

四国山脈中の御荷鉾帯に産するもので近くは旧鮎食川下流の氾濫原などから採集できる。表面の風化が激しい。緑色岩。

刃部と胴体部から折損しており刃部は集石中より出土し、胴体部は数メートル離れた井戸状遺構内の腐葉土攪乱層中より出土している。刃部先端は風化による刃こぼれとみると全体的に殆ど強い使用痕等傷みがみられない端正な石斧である。遺構の状態から近世に井戸を掘り抜いた際に攪乱を受けているのであるが、この石斧は何か幅の広い鍬の様なもので側面中央あたりから刃部方向への鋭角な衝撃を受けて折損した可能性もあり、完形で遺存していた可能性もある。

② 太型蛤刃石斧 (図 第17図・図版21)

- ・現存全長13.1cm。断面部分幅6.8cm。同厚さ4.8cm。現存重量0.94kg。
- ・石材は①に同じ。

集石遺構内より出土。刃部は欠損。上端部にはかなりの敲打痕があり、刃部折損後にハンマーに転用したものか。この石斧と同一地点で重なってサヌカイト製の凸基無茎式石鍬1点④4と同剝片1点④Fが相伴している。

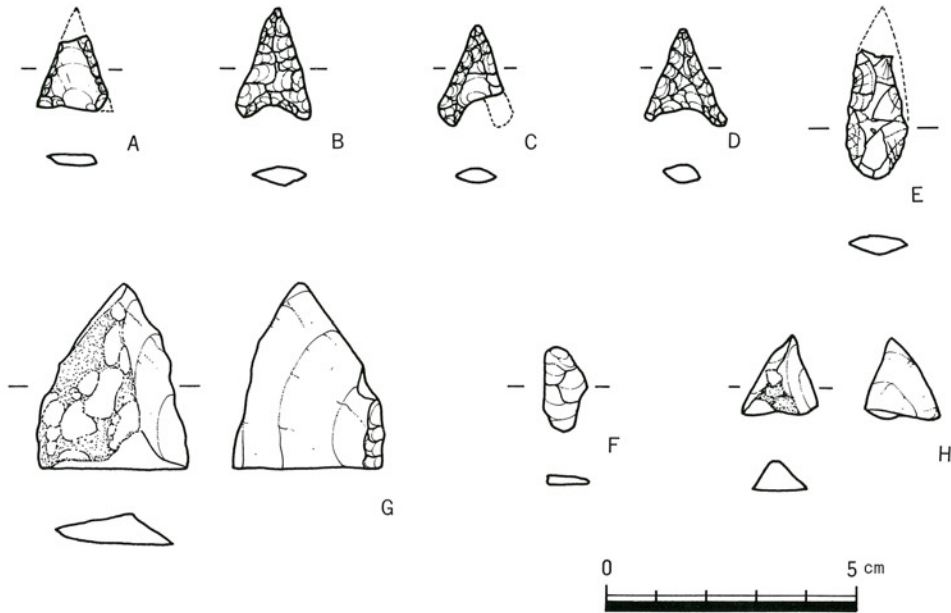
③ 有溝礫 (図 第17図・図版21)

和泉砂岩。上部攪乱層中より出土。欠損と思われる箇所は長軸方向片端と裏面である。石錘ないしは他用途の石器と思われる。

③ 石鎌・剥片 (図 第18図・図版22)

石材は総てサヌカイトである。集石内出土のものは特に白く風化している。

- A. 平基無茎式 集石内より出土。
- B. 凹基無茎式 井戸状遺構築地中。攪乱。
- C. 凹基無茎式 集石内より出土
- D. 凹基無茎式 D-2グリッド出土。集石床面と同一レベル。
- E. 凸基無茎式 ②の石斧の南側下より重なり出土。



第18図 石鎌・剥片実測図 ④A-H

- F. 横長状の剥片 ②の石斧の東側下より重なり出土。
- G. 横長状の剥片。集石内出土。片面に自然面を広く残す。
- H. 横長状の剥片 土器溜り一括資料。土器と土器の間に挟まれており流入土は少なかった。片面に一部自然面を残す。

2 灰原の灰について若干の所見

灰原はレンズ状に堆積しているが、そのレンズ状の最も厚い部分の真新しい断面は漆黒である。強い粘性があり容易に掘れるものではない。市販されている比較的安価な掘り具ではすぐに破損の憂き目を見る。炭化物は含んでいるものの多い量ではない。この灰層の中に土器が混入しているのである。土器を抜き出すために灰の固まりのまま乾燥させておくと、灰は漆黒から灰紫色になる。それを水に浸して

分離したのであるが、水の底に沈殿した灰は米粒大の炭化物を若干混入しているもの予想通り非常にキメ細かなシルト状である。炭化物については米粒大からまれに小指よりひと回り細い木の枝の1.0cm程度の小片を混じえる。灰原は土器と若干の炭化物以外に“異物。はまず含まない。

灰原と連続する強烈に焼け込んだ集石遺構。集石遺構内は多量の炭化粒や、焼けた岩砂粒を含み非常に堅緻に締め込んでいるにも拘らず灰原のこの量も厚い部分はキメ細かく岩砂粒等を混じえない。集石の状態からも殆ど完全燃焼の灰のみ掃き出したのであろうか。

海拔1.0m内外に存在するこの遺構。臨海であり灰層や焼けた集石が揃うと製塩遺構を想像するが、遺物の出土状況や採集しえた土器自体ではそれらを裏付ける確証に乏しい。

この22区と海岸線を分断して走る市道、内ノ海灘線。灰原はこの市道の下に潜り込んでおり、市道が通っていなければ灰原は緩斜面に沿って汀線に延びていたものと思われる。

灰原の灰が非常にキメ細かいシルト状である理由は一度海へ流れ出した灰が再び波に押し戻されて堆積したものか。又この遺構が窪地であるがために雨水の作用により分離されるような事があったためであらうか。いずれにしろその灰の中に特に2次火熱を受けていない土器が混入している。

弥生時代の気候等を考慮に入ると灰原、集石の成立要因を探る鍵は或いは既に破壊されているかも知れないがこの市道の下に潜り込んでいる可能性がある事も指摘しておく。

3 遺物編のまとめ

確認し得た遺物でみる限り、この22区は弥生時代中期よりその活動の跡が伺える。太型蛤刃石斧や石鏃を使用し残していった時期である。これらの石器類に非常に近い海拔で且つ距離も近くに土器溜りがある。器面調整等不明な面も多いが、若干土器溜りの海拔が上であり形態的にも一応畿内第5様式併行に含めるとすれば、年代的には多少空白期間は想定されるにしても集石遺構を残した弥生終末期迄連続とこの場所が利用されていた様子が伺える。

調査範囲が狭かった理由もあり住居址等の確認には至らなかった。大毛島とその周辺の島々に於いては約19箇所弥生～古墳時代の遺跡・遺構が確認されているが、未だこの期の確実な住居址調査例に乏しく僅か瀬戸町堂浦字日出にある「日出遺跡」に於いて(B-3)(K)両地点で隅丸方形の堅穴式住居各1棟が確認されているに過ぎない。

この22区を生産遺跡と捉える事が可能ならその性格を究明する上でも島嶼部周辺の居住地区詮索の必要もあり、環境上舟を用いざるをえない状況からも地方的にかなり広い視野で捉えていく必要がある事はいうまでもない。

更に本遺跡の集石は特定の場所として特定の目的のみに使用されていたと見られ、雑多な遺物が入り込んでいない点を再確認しておきたい。今後更に島の自然環境、立地条件等も含めて総合的に考察し資料の増加にも期待したい。或いは職業に於ける專業者集団の存在等に迫れる糸口になるかも知れない。

さて、弥生の終末で遺構は途絶え、上部攪乱層中の須恵器片を一応除外すると近世の井戸状遺構の出現迄土地利用は確認されず、攪乱系ながら井戸状遺構に伴っていたと思われる陶器、磁器があり江戸時代も後期のものである。「馬ノ口」の地名に繋がりを持つようなものは指摘できず遺構からも同様である。

最後につけ加えておくが第1トレンチ内の(SK-01)よりパミスと骨片が少量出土している(写真

参照)。この骨片は上部攪乱土にも相当散乱しており布留遺跡（天理市教育委員会・1979）出土の図版74～76を参照すれば牛馬の歯であろう事は想定できるが鑑定に待ちたい。なお（S K—01）は近世以降の攪乱と考えられる。

Ⅶ 第23区遺跡の地形と現状（図 第19図・図版23）

第23区遺跡（仮称）はウチノ海に面した大毛山系ではややゆるやかな斜面の標高6.75mから1.5mの高さに位置する。標高6mまでは非常に平坦な地形を呈し、それより低い部分はやや急な傾斜をなしている。この傾斜のちがいは、調査区東端の建物跡や調査区外であるが相当開墾を受け、段々に切り開かれているのである。したがって調査区の東半分は斜面を削平して平坦地とし、西半分が自然地形を多少残していると思われる。調査区の北と南は第22区と同じく軍事用小型船舶の隠し場所として開削された大きな凹みが見られ調査区域から除外した。

調査区の現状は西半分の斜面部分は相当年数をへた松と、戦後に生えたと思われる雑木が生い茂り、東半分の平坦部は建物の基礎部であるコンクリートと、屋根や壁に使用した廃材が相当投げこまれており、カヤとバラが密生した状態であった。調査の際、巨木の松の根の排除とゴミ捨て場となっているゴミ（特に真珠養殖に用いた網かご、ワイヤー等）の除去に相当労力を要した。

Ⅷ 基本層序（図 第20図・図版24）

第1トレンチ

—調査区西側トレンチ—

第1層は10Y R $\frac{5}{2}$ 小礫から人頭大の石を含む黒褐色土層であり、いわゆる腐葉土層である。

第2層は10Y R $\frac{5}{2}$ にふい黄褐色砂質粘土層であり、調査区北側でごくわずかにみられた層である。

第3層は10Y R $\frac{5}{2}$ にふい黄褐色砂質粘土層であり、第2層と同じく北側でごくわずかにみられた層であり、第2層とともに以前に掘りこまれた凹地に堆積した層である。

第4層は10Y R $\frac{5}{2}$ 明黄褐色大礫まじり砂質粘土層であり、表土と岩盤にはさまれた層である。

第5層は10Y R $\frac{5}{2}$ 明黄褐色と10Y R $\frac{5}{2}$ 灰黄褐色砂質粘土層の混合層であり、第4層と同様に岩盤直上層と考えられる。

第6層は7.5Y R $\frac{5}{2}$ 灰白色礫まじり砂質粘土層であり、開墾の際の攪乱を受けて堆積した層と思われる。この層より須恵器片が数点出土している。

第7層は10Y R $\frac{5}{2}$ 明黄褐色砂質粘土層であり、粒状の小礫が多く混ざりよくしまった自然堆積層である。

第8層は10Y R $\frac{5}{2}$ 黒褐色砂質土層であり、やや粘質砂岩の礫を多く含んだ層である。

第9層は10Y R $\frac{5}{2}$ 明黄褐色砂質土層であり、黒っぽいマンガン質粒を含む層である。

第10層は10Y R $\frac{5}{2}$ 黒褐色砂質粘土層であり、砂岩の礫を多く含んでおり、第8層と同様の層と考えられる。

第11層は10Y R $\frac{5}{2}$ 褐灰色粘質土層であり、粒子の細かい土壌であり、砂岩の礫を含んでいる。

以上が第1トレンチの土層の堆積状態であるが、第6層の攪乱層に遺物を含んでいる以外は無遺物であり、トレンチ南端の第6層から第10層にかけては、黒褐色土層と明黄褐色土層が互層となっており、

2回にわたる東斜面からの流入土の状態の堆積を示している。

第4 トレンチ

—調査区東側トレンチ—

第1層は10Y R $\frac{3}{4}$ 黒褐色土層（小礫から大礫を含む）であり，建物跡に使用された現代陶器，磁器片が出土している。

第2層は10Y R $\frac{3}{4}$ にぶい黄褐色砂質粘土層であり，第1層とほぼ同時期の遺物を含んでいる。

第3層は10Y R $\frac{3}{4}$ にぶい黄褐色砂質粘土層であり，第2層と同質の層であるが，第2層との境で非常に薄く黒褐色土層が被覆しており，しかも第3層がよくしまっていることから一応分けたものである。この層は開墾の際上段の土壌を削り取り平坦にならした整地層と考えられる。

第4層は10Y R $\frac{6}{10}$ 明黄褐色砂質粘土層であり，大毛山系の岩盤直上層と思われ無遺物層である。

第3'層10Y R $\frac{3}{4}$ にぶい黄褐色砂質粘土層及び第4'層10Y R $\frac{6}{10}$ 明黄褐色砂質粘土層は，建物跡に伴う排水暗渠等の攪乱層であり，いずれも第4層を切りこんだ状態で確認された。

以上が第4トレンチの堆積状況であるが，建物跡によって削平され，第1層，第2層に現代陶磁器が検出され，第4層は大毛山系の岩盤上面を形成している無遺物層である。

第IX 遺 物（図 第21図）

23区は昭和52年度の分布調査時には「平坦地」とされたが実際には細長く狭隘な崖面であり，遺構が存在する可能性は薄かった。しかしながら殆ど上部からの崩壊攪乱土の堆積である層の中から須恵器提瓶の中破片が2個体分と，少量ながら弥生土器片，土師質土器片等が出土した事により，旧地形を少し再検討をする機会をもち，当23区にそう遠くない場所に古墳時代等の遺構が存在していたのではないかとこの予測を得たのは大きな成果であった。

○ 出土遺物所見

① 須恵器。提瓶胴部。胎土はキメ細かく1～3mm程度の灰色がかった石英片岩粒を若干含み焼成は良好。全体に白灰色に発色する。外面の調整及び成形は看取できうる限り，カキ目の上に平行タタキを施し不完全にナデ消した後，最後にもう一度荒いカキ目を全面に同心円状に施す。部分的には最後のカキ目の上にへら状工具で更にナデている。

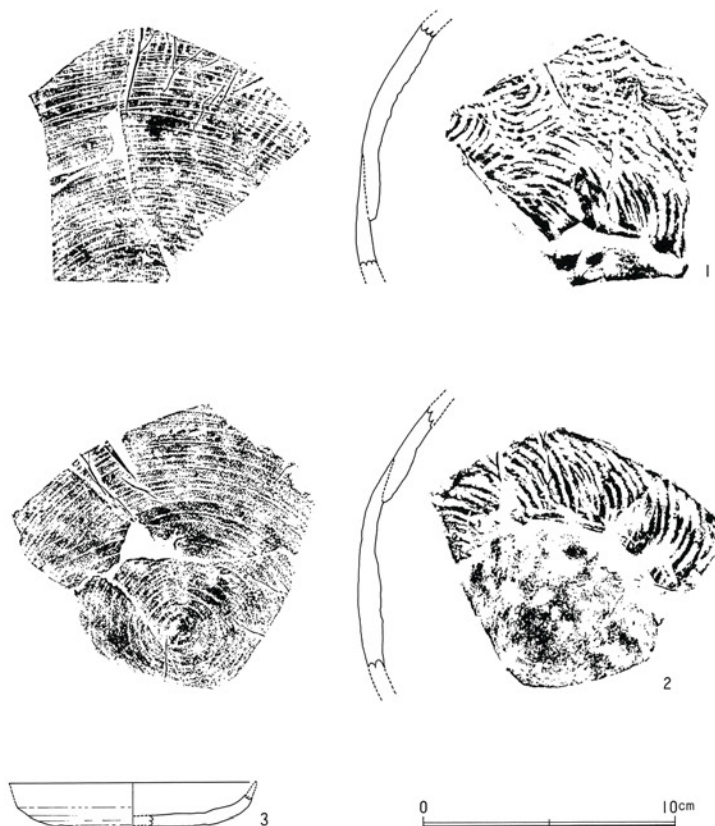
内面は青海波文が全面に認められ，貼り合わせた胴中央部には指頭による皮ないし織り目細かな布様の圧痕が認められる。

② 須恵器。提瓶胴部。胎土はやや荒く2～5mm程度の茶，緑，灰色等の結晶質岩石粒を若干含む。焼成はやや不良で全体に黄灰色に発色する。外面の調整及び成形は看取できうる限り，タタキ目は残さずカキ目を施した後一部を不完全にナデ消し，最後にもう一度同心円状にカキ目を施している。部分的には更にカキ目やへら状工具でナデている。外面残部の表面5分の1程度に砂粒が多く付着する。

内面は青海波文が全面に認められ，貼り合わせた胴中央部には指頭による皮ないし織り目細かな布様

の圧痕が認められる。

③ 土師質皿，推定復元口径約9.8cm。胎土はキメ細かく細砂粒を若干含み焼成は良好。全体に淡い赤茶色に発色する。底部に粘土紐巻き上げによる接合面が認められる。



第21図 23区出土遺物実測図(第23区)

X まとめ

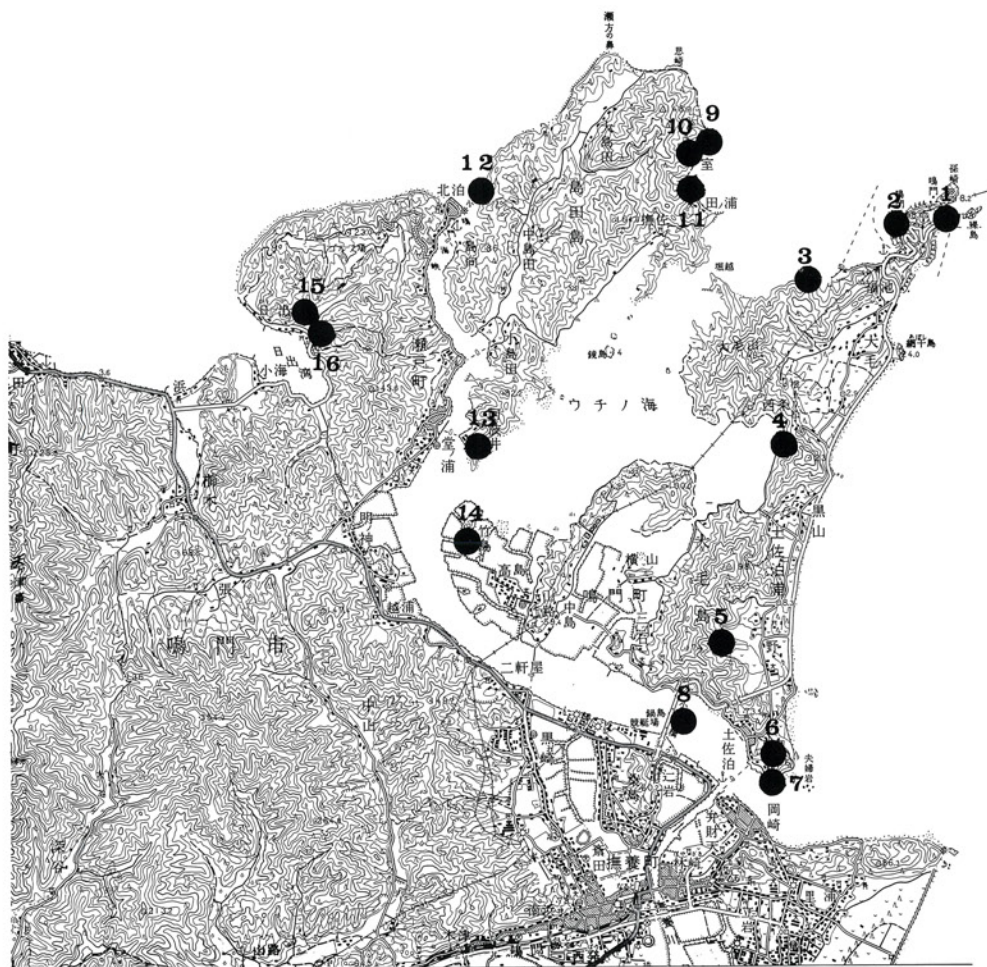
今回の概報は調査における事実経過をまとめたものである。なお各遺構・遺物の性格等については、「大鳴門橋」架橋関連工事に伴う埋蔵文化財発掘調査を終了した後、本報告を作成する際に詳細は述べることとする。

1. 従来、大毛島内においては標高3m以上の高さを調査の対象としていたが、今回の調査において標高1m未満でも遺構・遺物の存在が確認され、今後の調査に貴重な参考資料となった。
2. 太型蛤刃石斧が2点出土しており、立地場所からみて、海に関する生産活動を行っていたことがうかがえる。
3. 集石遺構は焼石・灰原遺構、焼土等を伴い海岸に向ってわずかではあるが傾斜していること、前述の磨製石斧などから考えてみると、火を利用した何らかの生産遺構の存在が考えられる。

以上が今回の調査のまとめであるが、詳細にわたって十分な検討がなされていないため、本報告の際に多少内容に変更があることを附記しておく。

文 献

- ・徳島県教育委員会「徳島県文化財調査概報」1976
- ・徳島県教育委員会「徳島県文化財調査概報」1977
- ・小林行雄・佐原 真「紫雲出」1964・9
- ・田辺昭三（平安学園考古学クラブ）「陶邑古窯址群Ⅰ」1966
- ・奈良県立橿原考古学研究所編「六条山遺跡」1980・3
- ・岩崎正夫編（徳島市中央分民館）「徳島の自然地質1」1979・3・20
- ・中川衷三編（徳島市中央公民館）「徳島の自然地質2」1981・3・20
- ・天理市教育委員会「布留遺跡範囲確認調査報告書」1979・3・31
- ・京都帝国大学文学部考古学研究報告「大和唐古弥生式遺跡の研究」1943・3・30
- ・世界考古学大系第2巻「日本Ⅱ・弥生時代」1960・4・5・平凡社
- ・世界陶磁全集(8)「江戸Ⅲ」1978・小学館
- ・鳴門市史編纂室編「鳴門市史」1976



第1図 大毛島第22, 23区遺跡周辺の遺跡

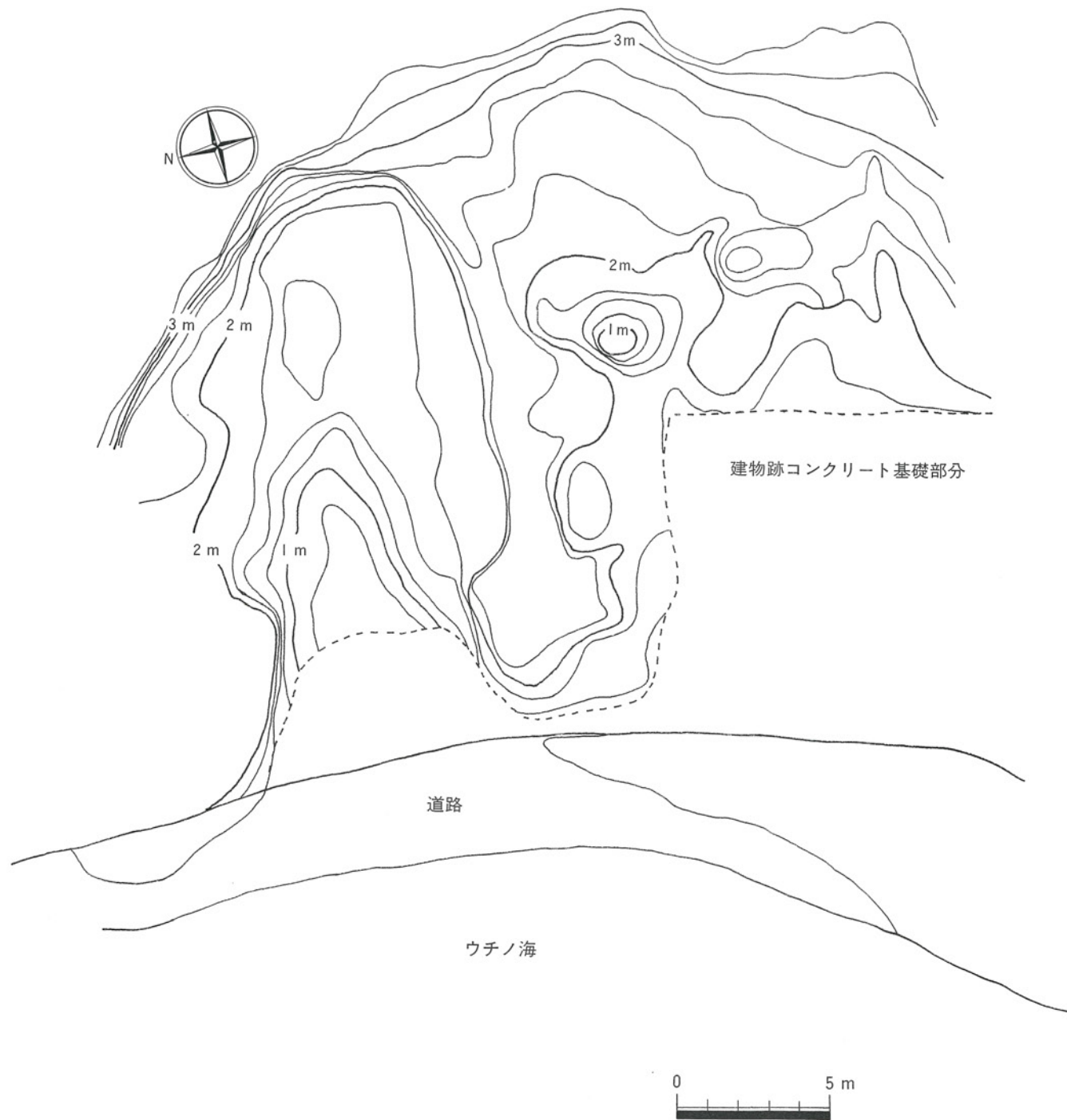
- 1. 鳴門公園千畳敷下遺跡
- 2. 北山古墳
- 3. 納言山古墳
- 4. 大毛島第22, 23区遺跡
- 5. 大毛島第39区遺跡
- 6. 土佐泊廃寺(仮称)
- 7. 松瀬山古墳
- 8. 撫養下部工事旧石器採集地
- 9. 室古墳群
- 10. 室遺跡
- 11. 田ノ浦古墳群
- 12. 島向古墳
- 13. 阿波井神社古墳
- 14. 竹島古墳
- 15. 日出古墳群
- 16. 日出遺跡

1 : 50,000

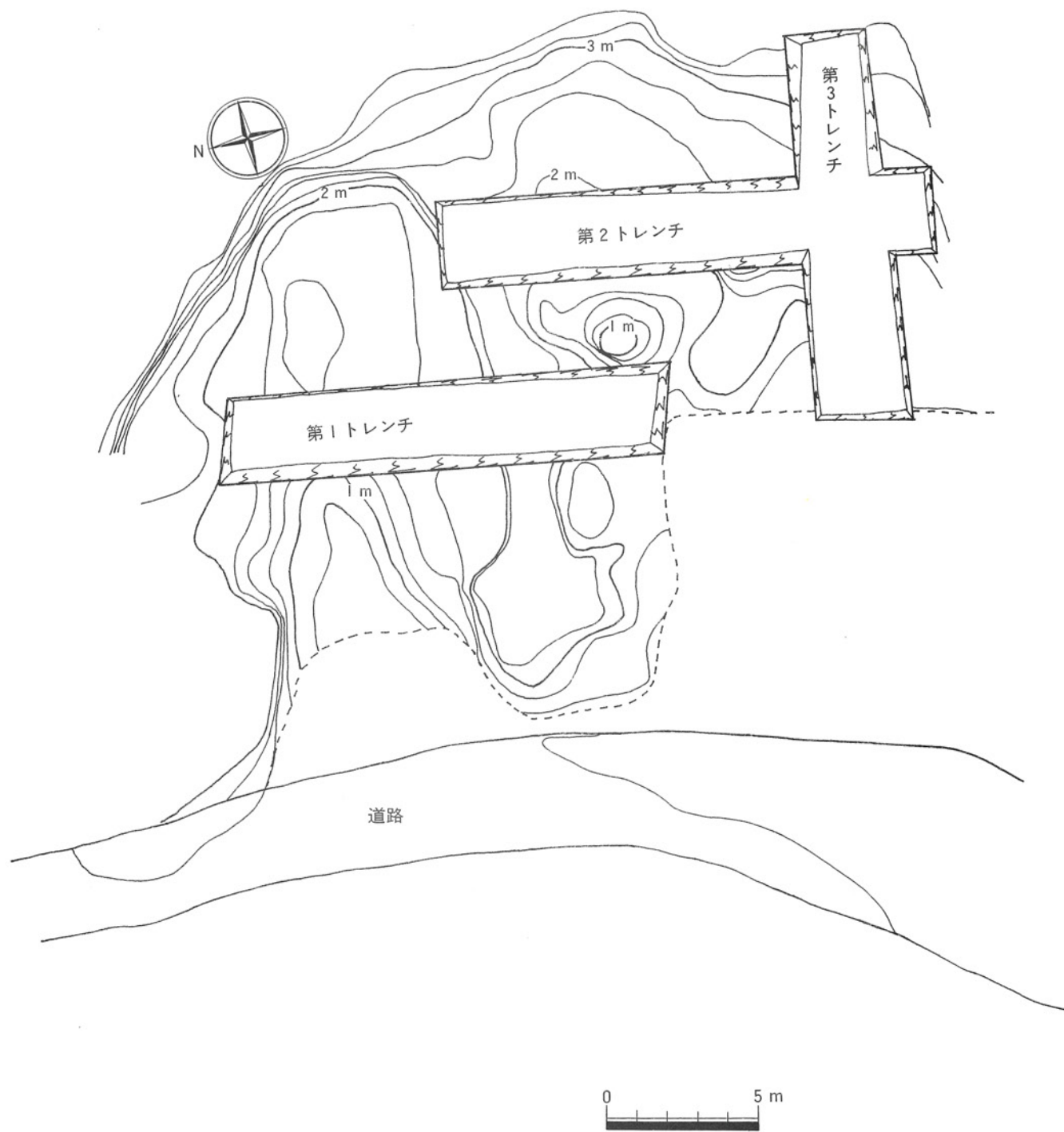
鳴門海峡

国土地理院発行

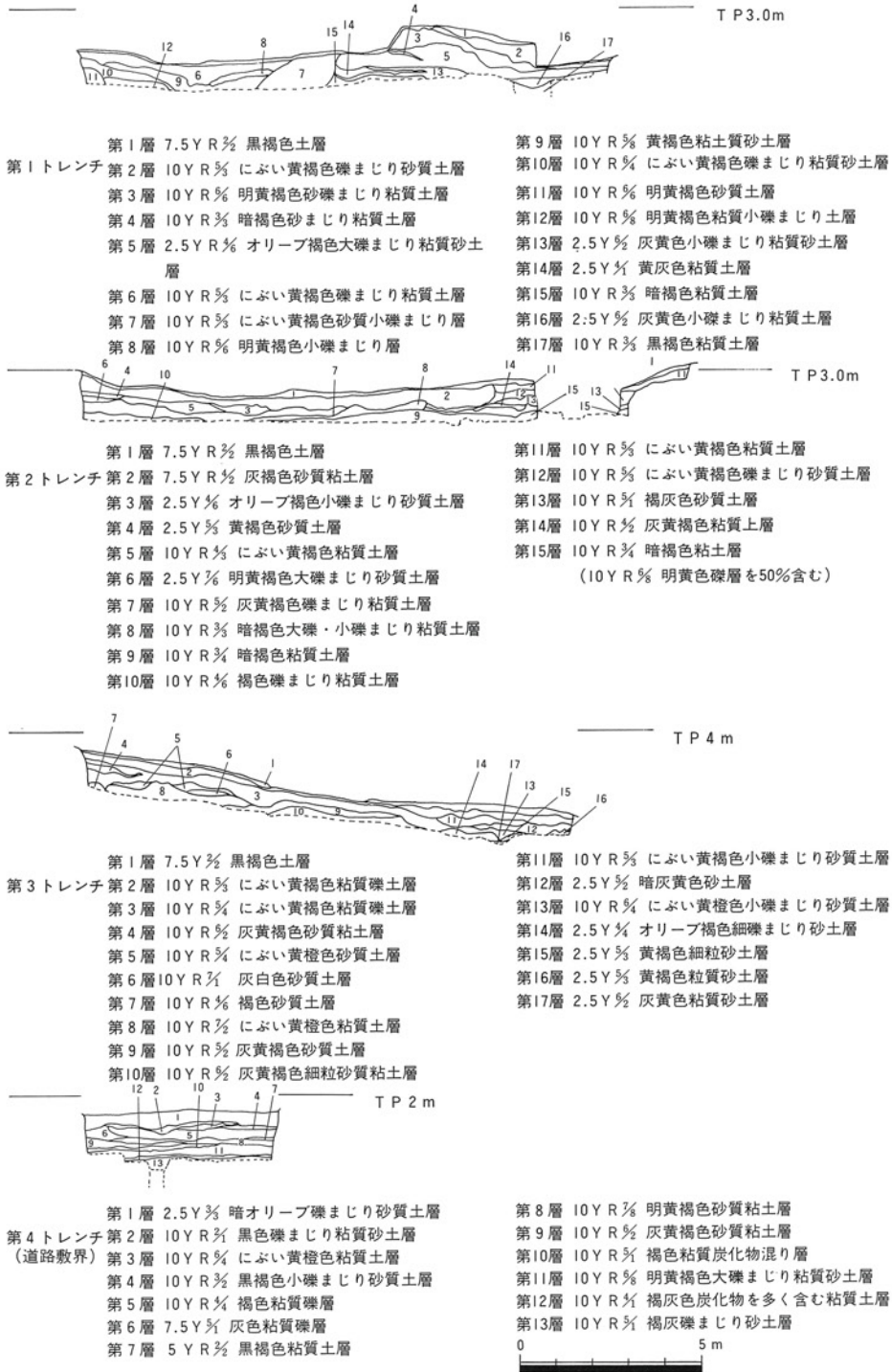
第1図 大毛島第22・23区遺跡と周辺の遺跡



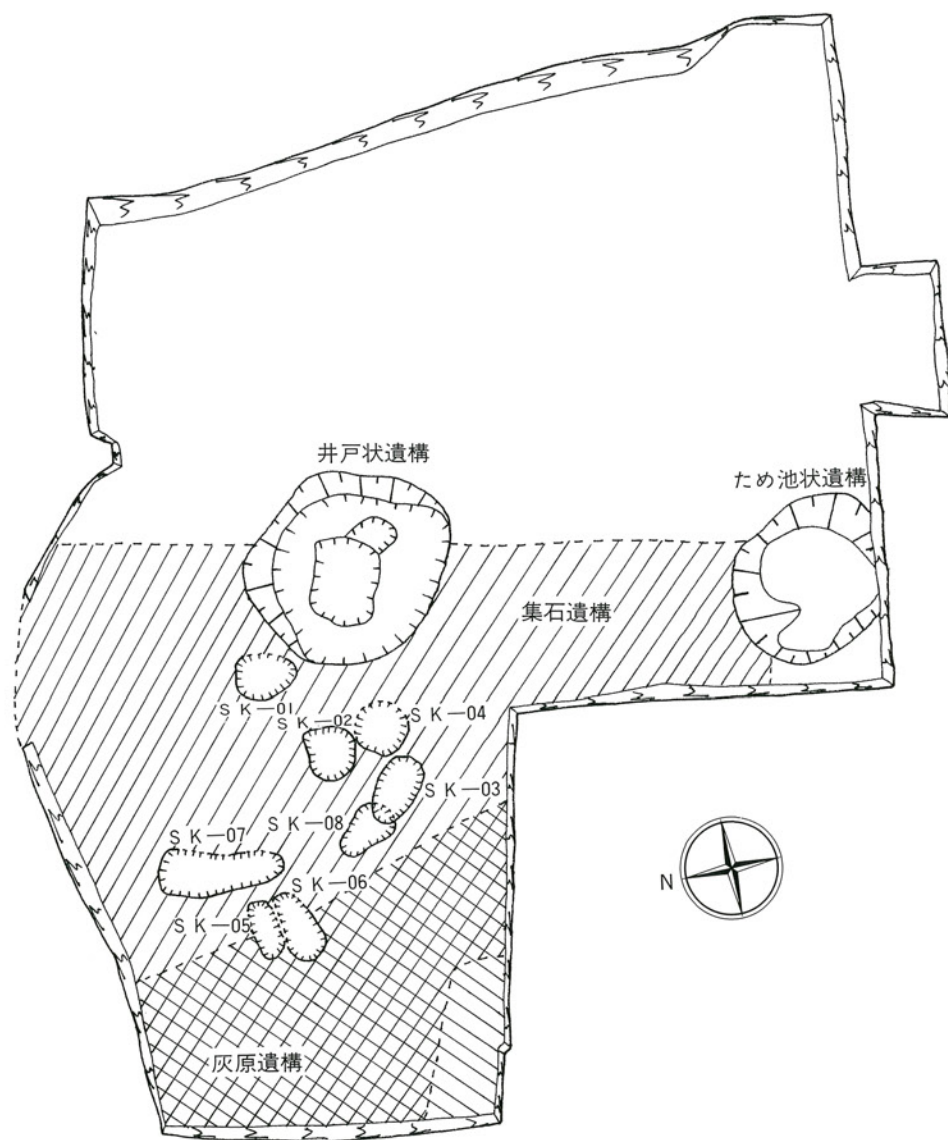
第2図 大毛島第22区遺跡地形測量図



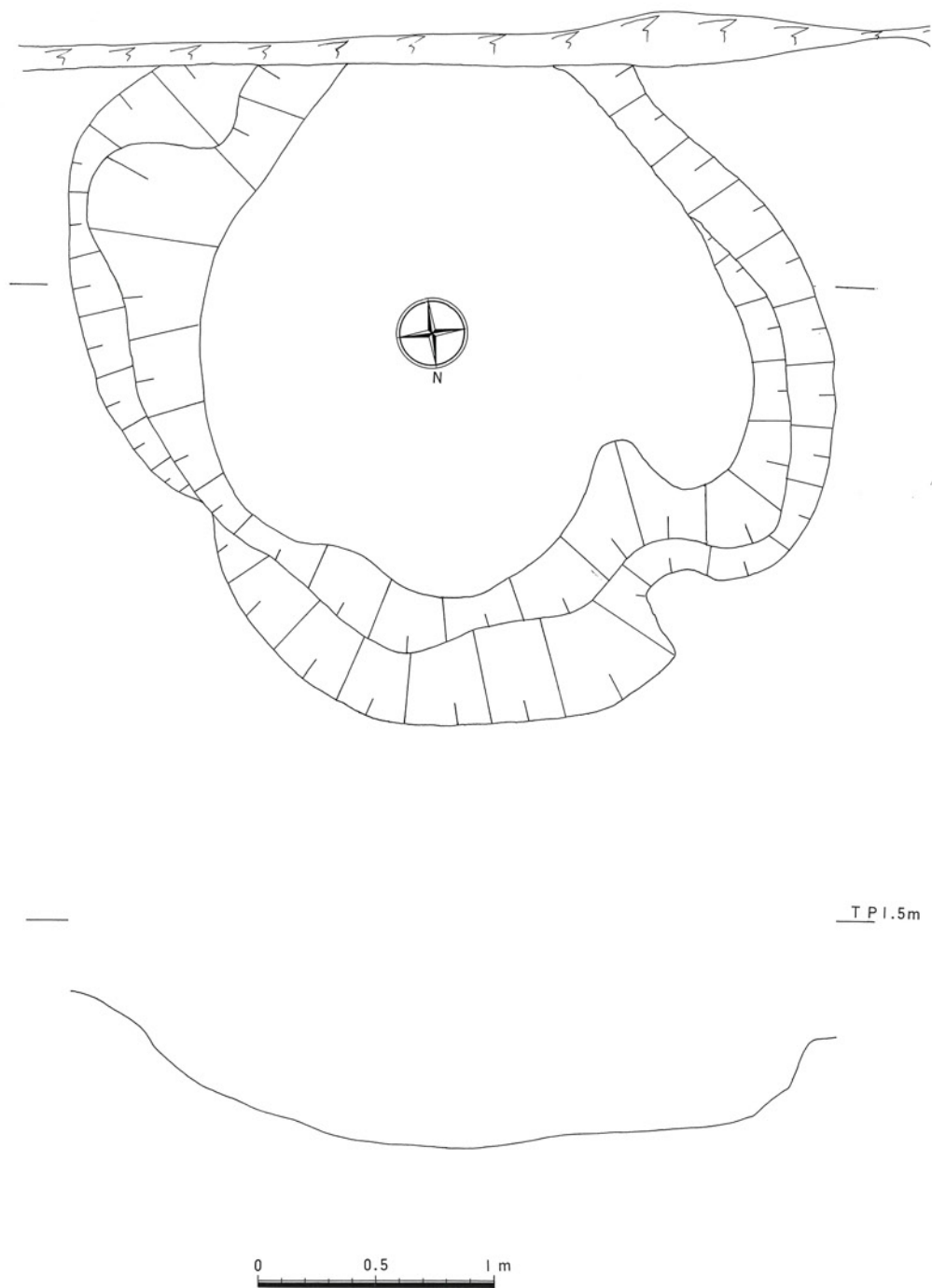
第3図 大毛島第22区遺跡トレンチ配置図



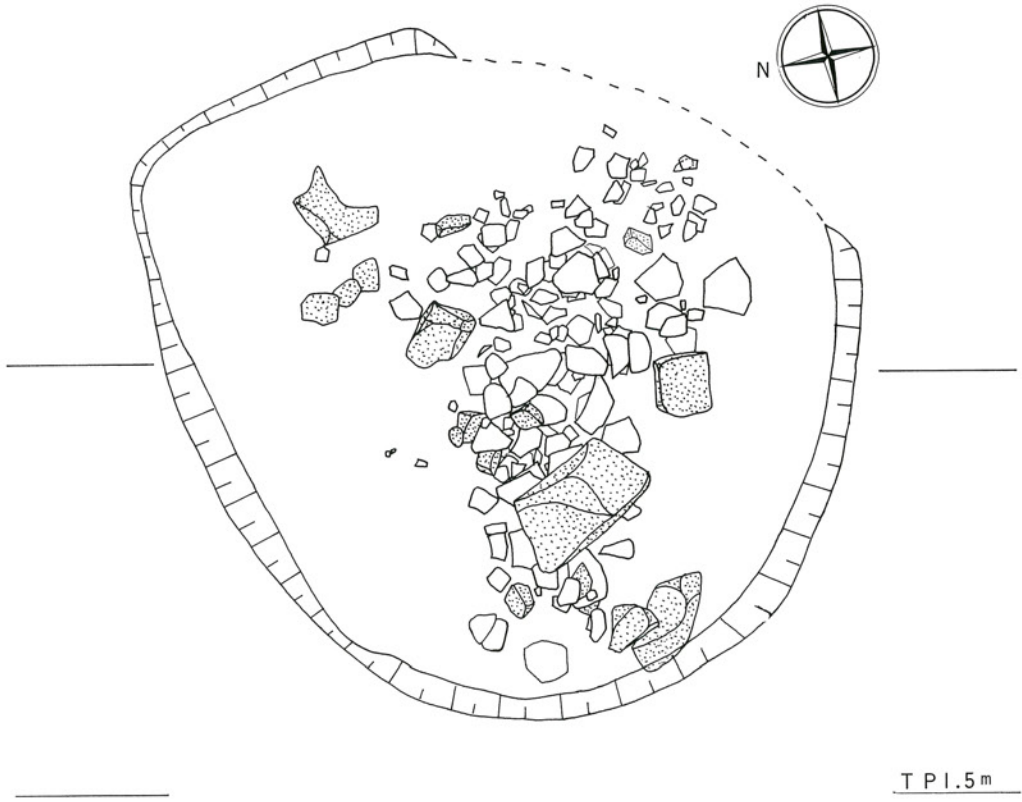
第4図 大毛島第22区遺跡土層図



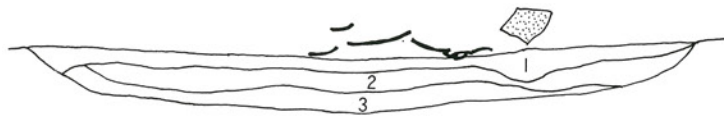
第5図 遺構配置図



第6図 溜め池状遺構



T P 1.5 m

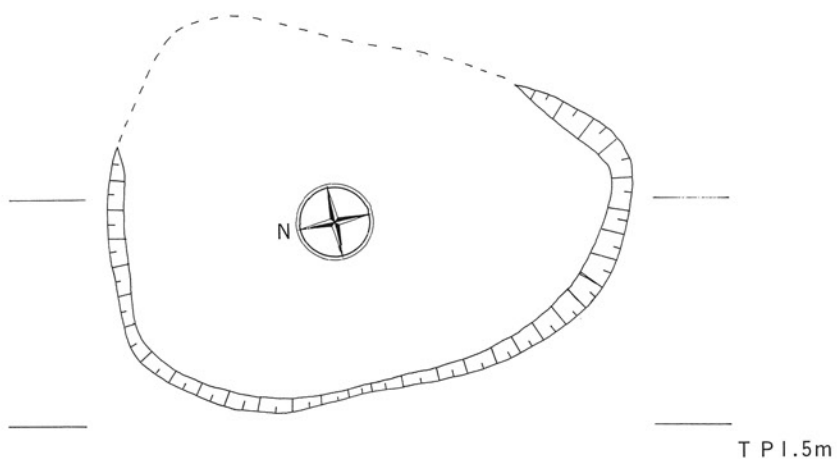


- 第1層 5 Y R $\frac{1}{2}$ 灰色粘質土層
- 第2層 2.5 Y R 暗灰黄色粘質土層
(10 Y R $\frac{3}{4}$ 暗褐色砂質土層を少量含む)
- 第3層 10 Y R $\frac{3}{8}$ 暗褐色砂質土層

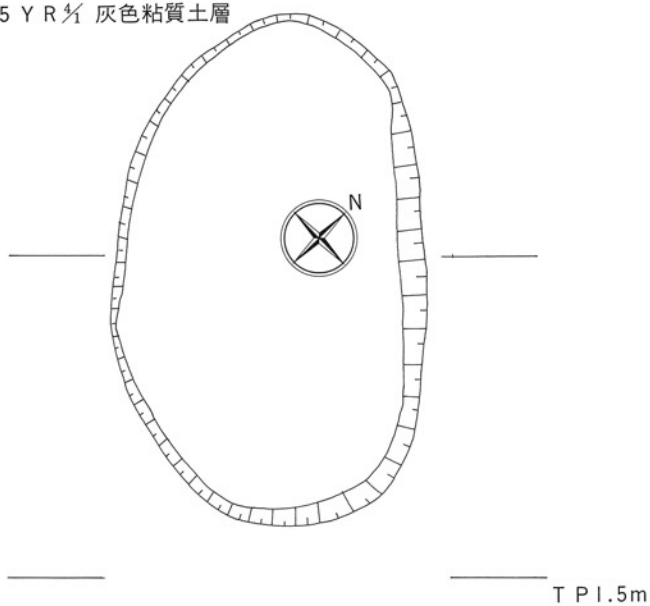


印は石を表す

第7図 土器だまり遺構 (SK-02) 土器出土状況及び断面図



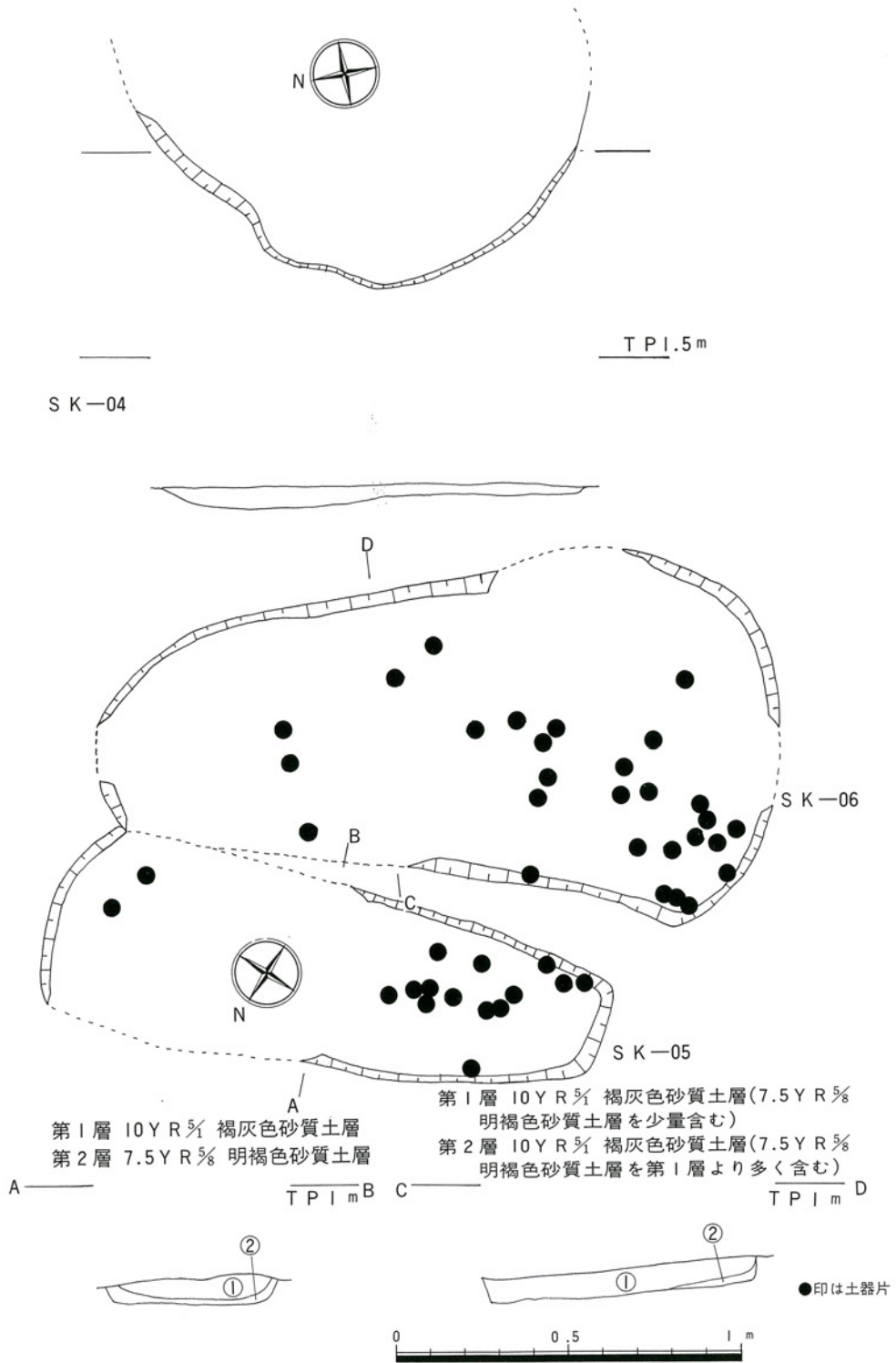
S K-01
 第1層 5 Y R $\frac{1}{2}$ 灰色粘質土層



第1層 2.5 Y $\frac{1}{2}$ 暗灰黄色粘質小礫まじり層
 第2層 5 Y R $\frac{1}{2}$ 灰色粘質小礫まじり土層

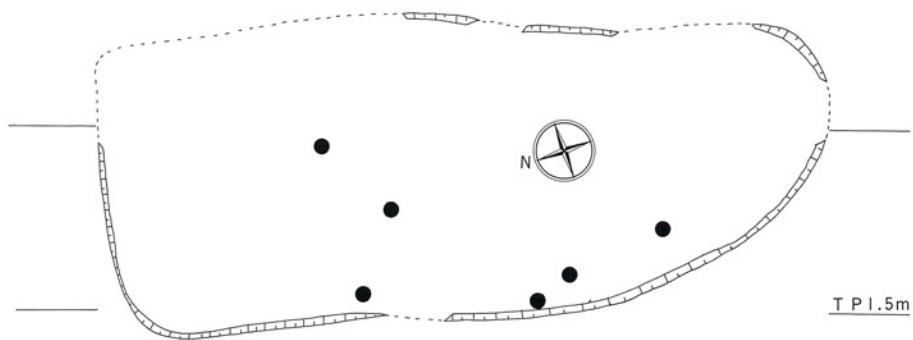


第8図 土壤状遺構 (S K-01, 03) 平面図及び断面図



第9図 土壌状遺構 (S K-04, 05, 06) 平面図及び断面図

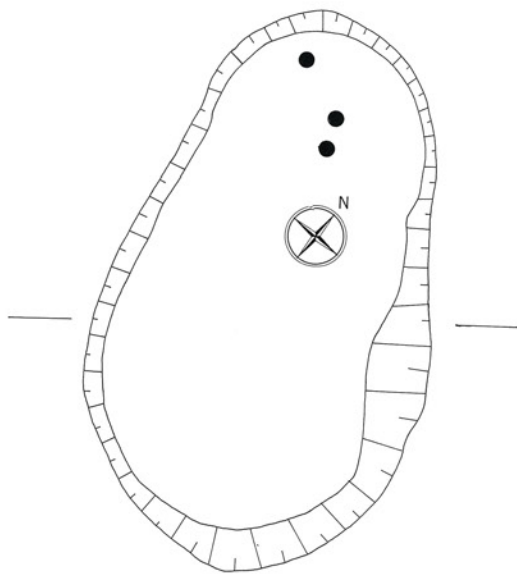
①・②は土層の番号を示す



S K-07

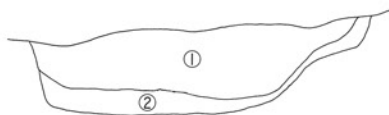


土層 10Y R ㊦ 褐色砂質土層



S K-08

T P I. 5m



第1層 10Y R ㊦ 褐色砂質土層

第2層 7.5Y R ㊦ 明褐色砂質土層・10Y R ㊦ 褐色砂質土層混合層

●印は土器片

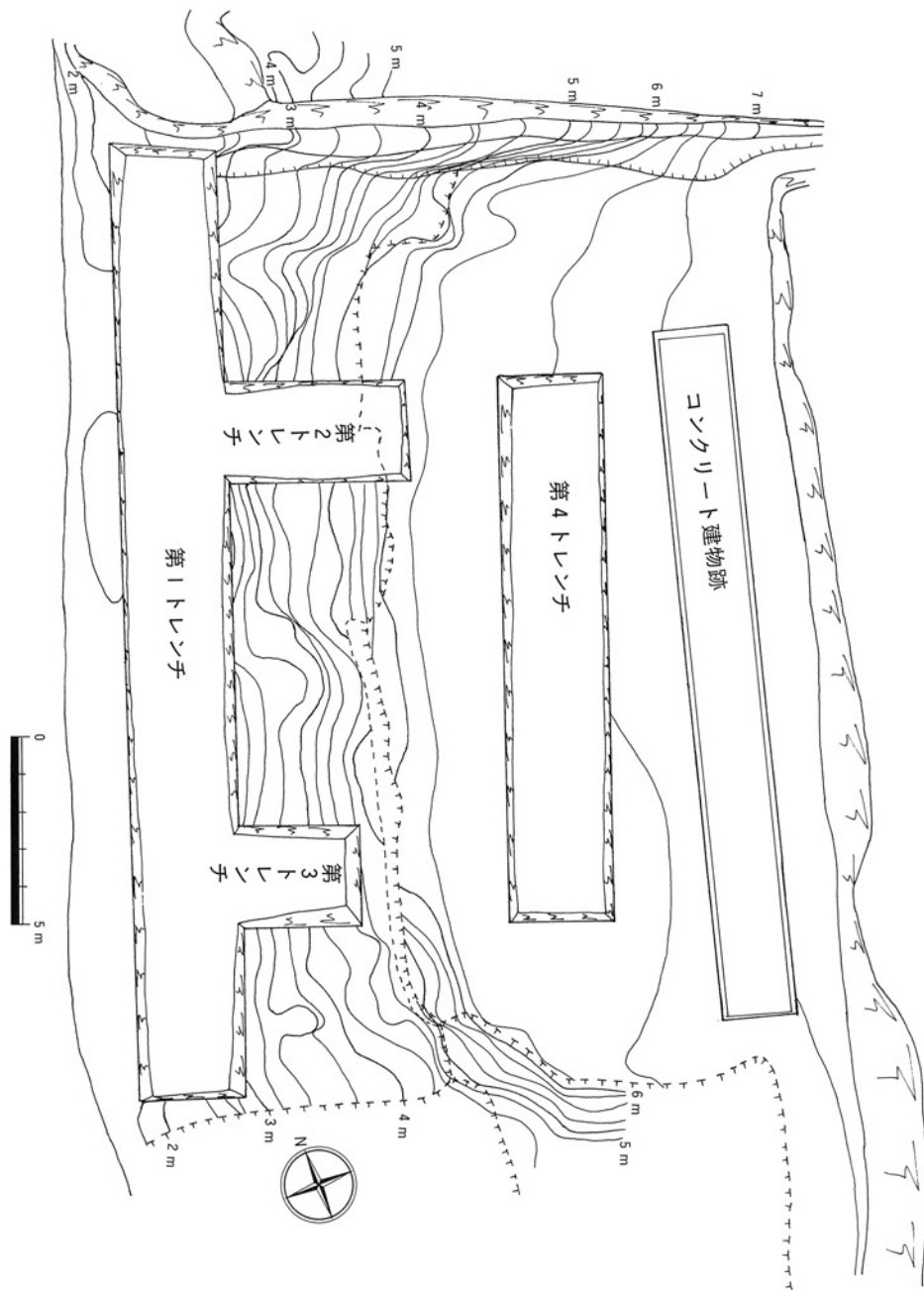


第10図 土壌状遺構 (S K-07, 08) 平面図及び断面図



..... 灰原遺構の東限を示す
 ●印 焼石をあらわす

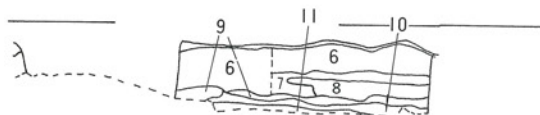
第11図 大毛島第22区井戸跡・集石遺構・灰原遺構図



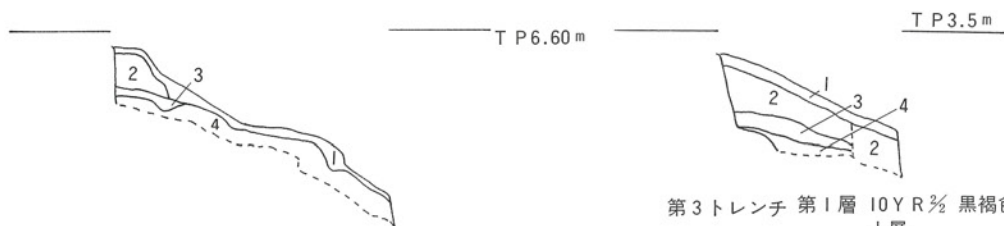
第19図 大毛島第23区遺跡地形測量図及びトレンチ配置図



- 第1層 10Y R ½ 黒褐色土層
- 第2層 10Y R ¼ にぶい黄褐色砂質粘土層
- 第3層 10Y R ¼ にぶい黄褐色砂質粘土層
- 第4層 10Y R ⅙ 明黄褐色大礫まじり砂質粘土層
- 第5層 10Y R ⅙ 明黄褐色 · 10Y R ⅙ 灰黄褐色砂質粘土混合層
- 第6層 7.5Y R ⅙ 灰白色礫まじり砂質土層
- 第7層 10Y R ⅙ 明黄褐色砂質粘土層
- 第8層 10Y R ⅙ 黒褐色砂質土層
- 第9層 10Y R ⅙ 明黄褐色砂質土層
- 第10層 10Y R ⅙ 黒褐色砂質粘土層
- 第11層 10Y R ⅙ 褐灰色粘質土層

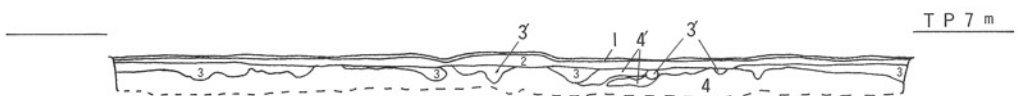


第1トレンチ



- 第2トレンチ
- 第1層 10Y R ½ 黒褐色土層
 - 第2層 10Y R ¼ にぶい黄褐色砂質粘土層
 - 第3層 10Y R ¼ にぶい黄褐色砂質粘土層
 - 第4層 16Y R ⅙ 明黄褐色大礫まじり砂質粘土層

- 第3トレンチ
- 第1層 10Y R ½ 黒褐色土層
 - 第2層 10Y R ⅙ 明黄褐色砂質粘土層
 - 第3層 10Y R ⅙ 黒褐色砂質土層
 - 第4層 10Y R ⅙ 明黄褐色砂質粘土層



- 第4トレンチ
- 第1層 10Y R ½ 黒褐色土層
 - 第2層 10Y R ¼ にぶい黄褐色砂質粘土層
 - 第3層 10Y R ¼ にぶい黄褐色砂質粘土層
 - 第4層 10Y R ⅙ 明黄褐色砂質粘土層
 - 第3', 第4'層 攪乱層



第20図 大毛島第23区遺跡土層図

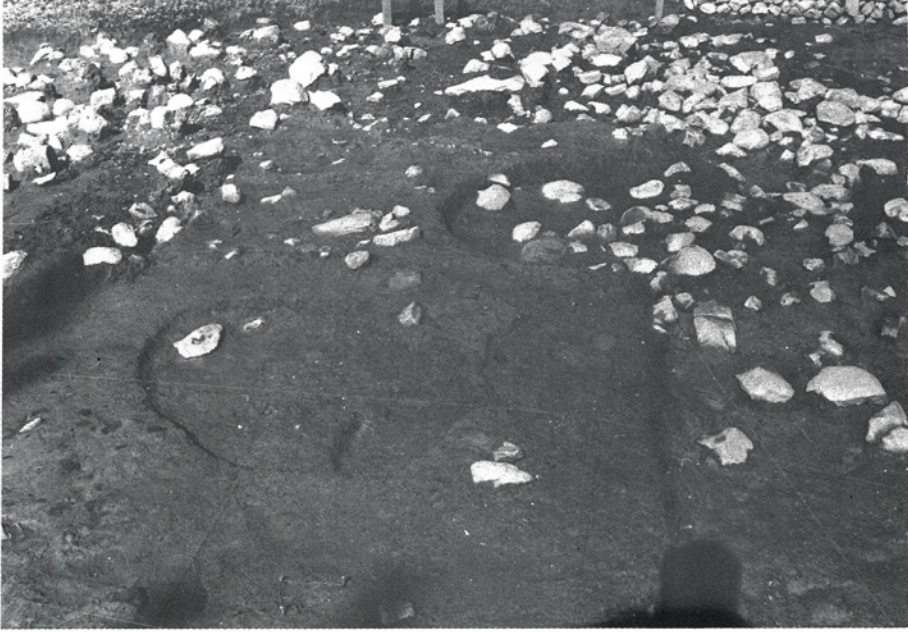


大毛島第22区遺跡調査前



同 上 ため池状遺構

図版1 大毛島第22区遺跡調査前，溜め池状遺構



土壤状遺構 手前左 S K - 03 右 S K - 04 上 S K - 02



同 上 近景

図版 2 土壤状遺構 (S K - 03, 04, 05)



土 壙 状 遺 構 S K - 0 2

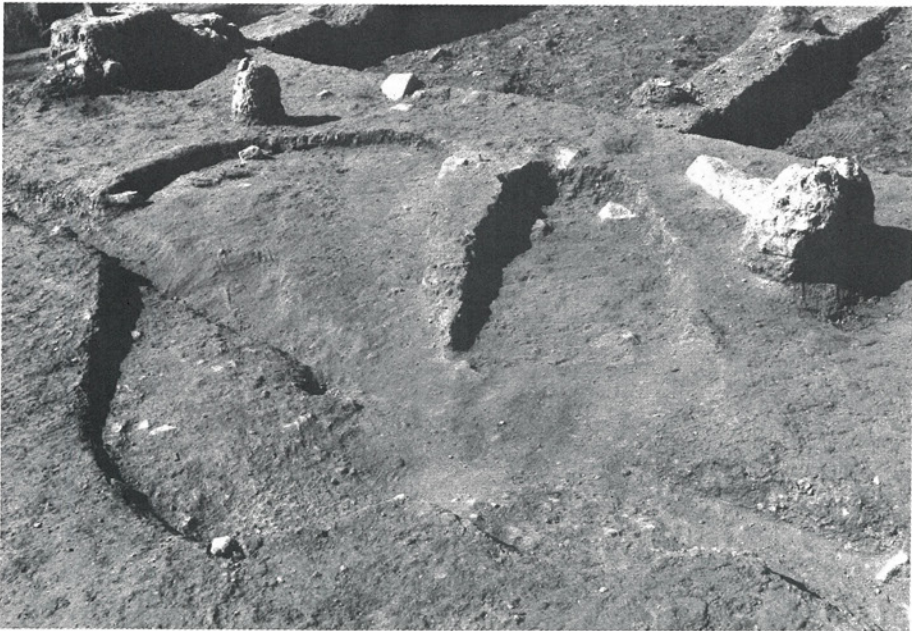


土 壙 状 遺 構 S K - 0 3

図版 3 土 壙 状 遺 構 (S K - 0 2 , 0 3)



土壤状遺構 SK-04

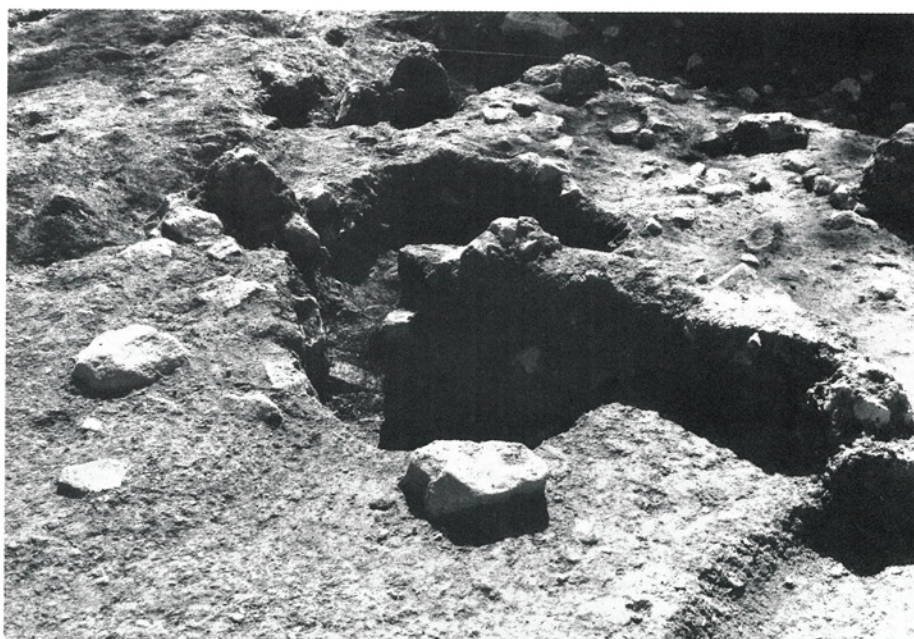


土壤状遺構 SK-05 SK-06

図版4 土壤状遺構 (SK-04, 05, 06)



土 壙 状 遺 構 S K - 0 7



土 壙 状 遺 構 S K - 0 8

図版 5 土 壙 状 遺 構 ((S K - 0 7 , 0 8)



井戸状遺構（手前）と集石遺構



同上集石遺構

図版6 井戸状遺構・集石遺構



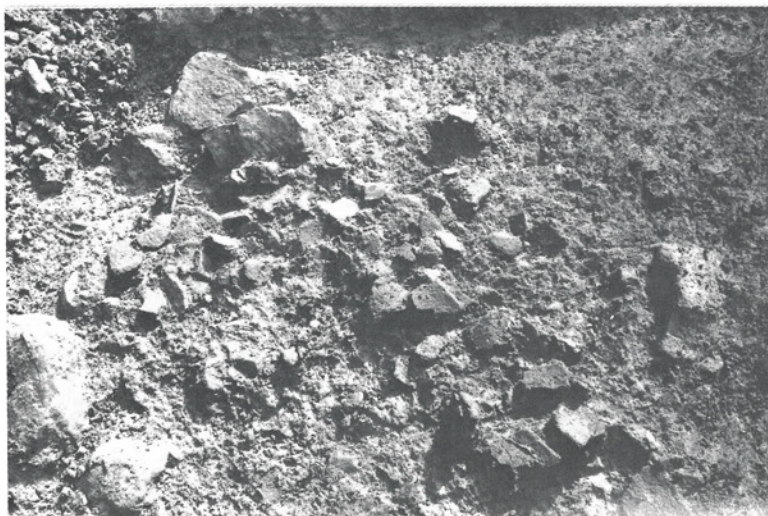
集石遺構



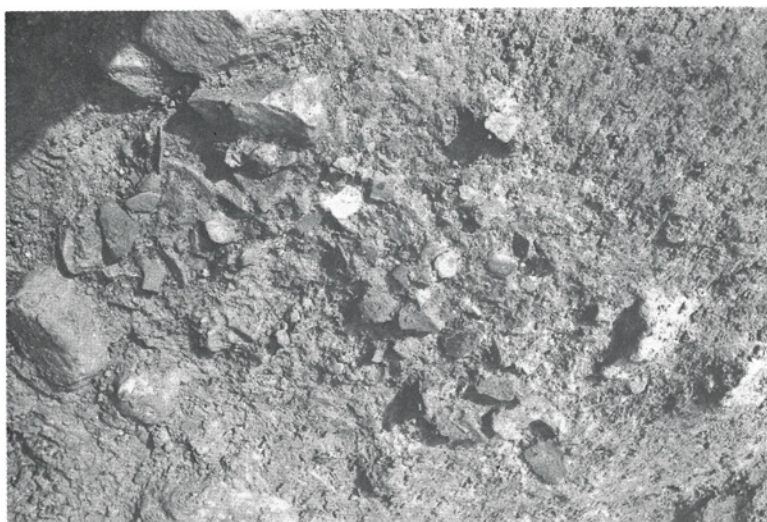
同 上

図版 7 集石遺構

土器溜り遺構
出土状況(S K-02)



同 上



同 上



図版 8 土器だまり遺構 (S K-08) 出土状況

大型蛤刃石斧
出土状況



同上
刃部出土状況



集石遺構
(南より撮影)



図版 9 遺物出土状況

土器出土状況



同 上



同 上

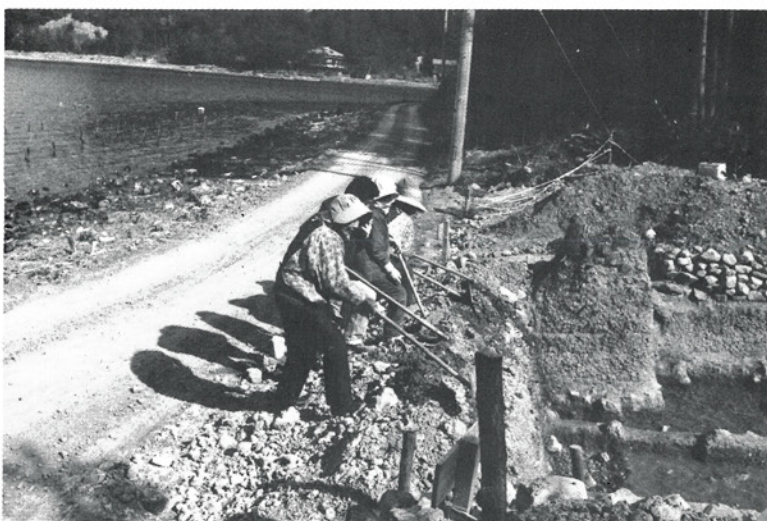


図版10 土器出土状況

作業風景



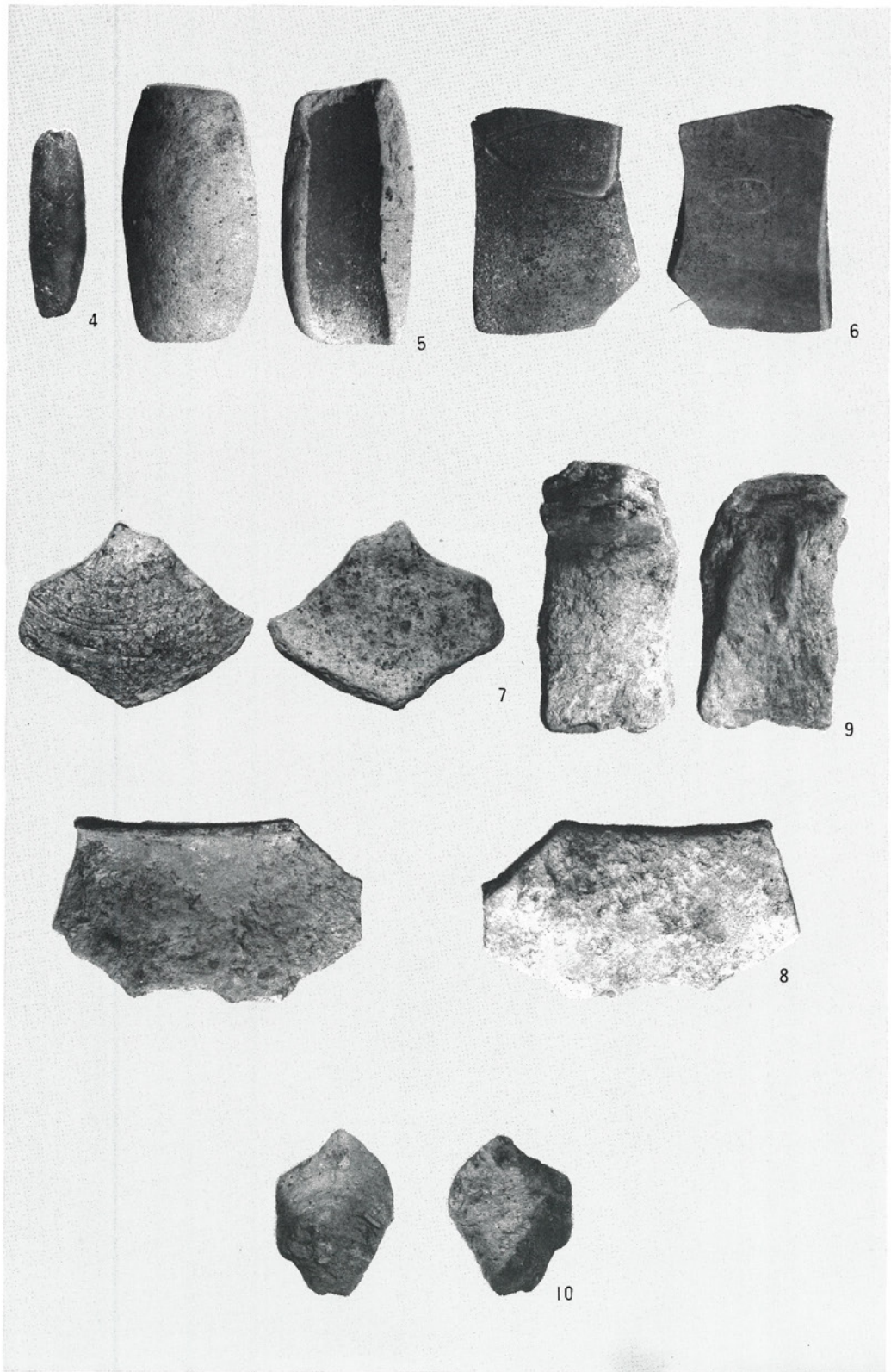
同 上



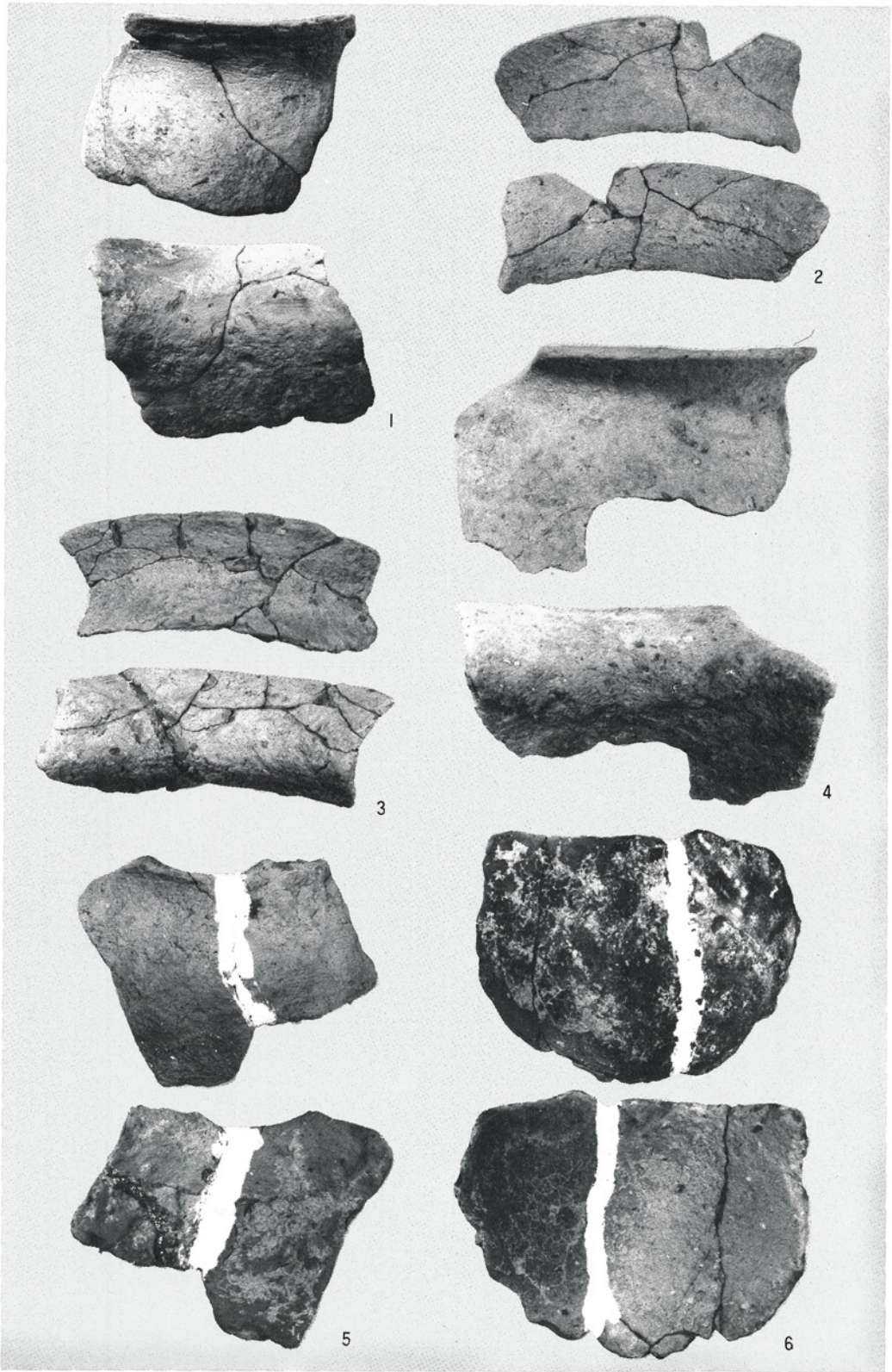
同 上



図版II 作業風景



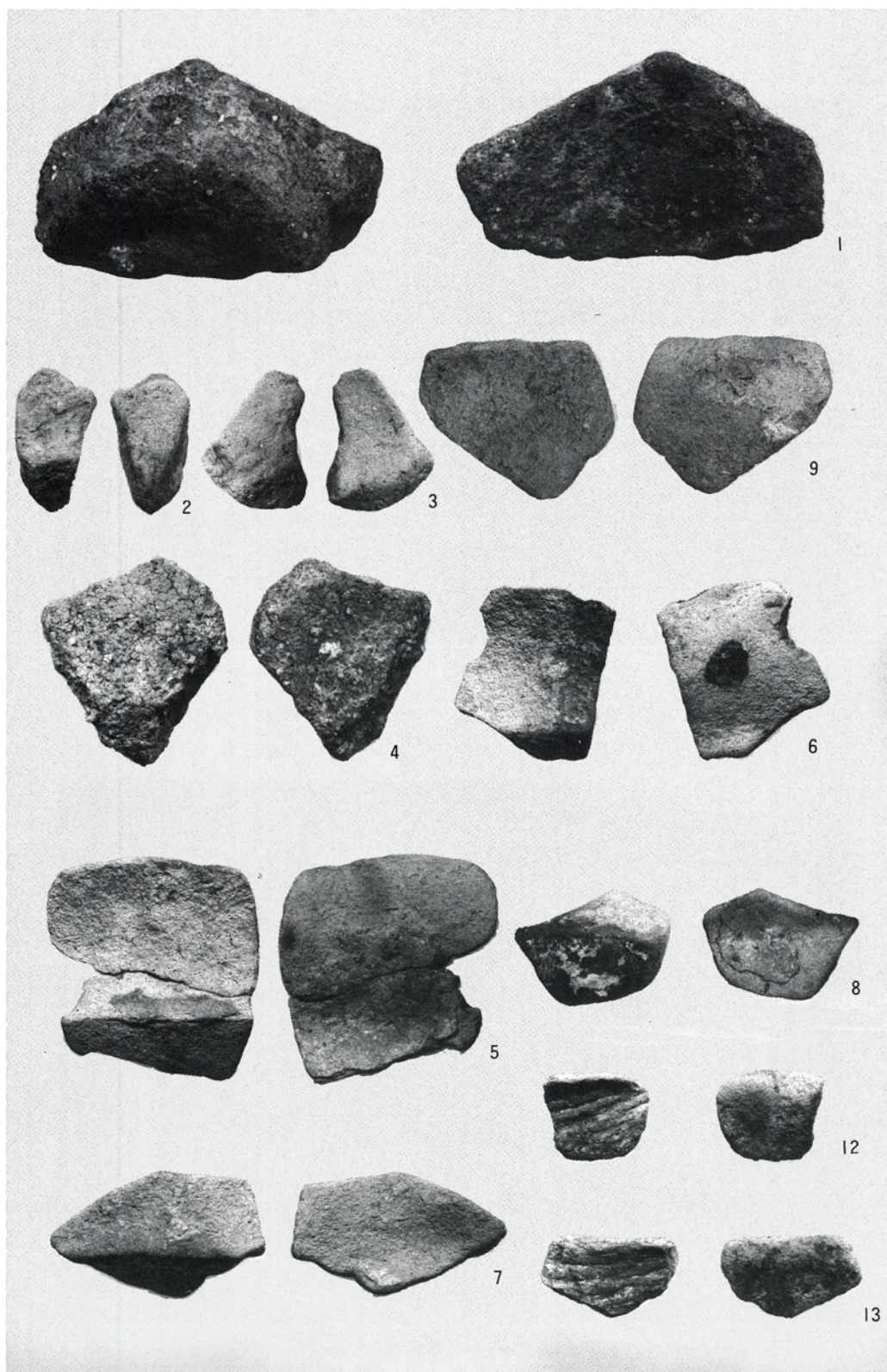
图版14 攪乱層内出土遺物



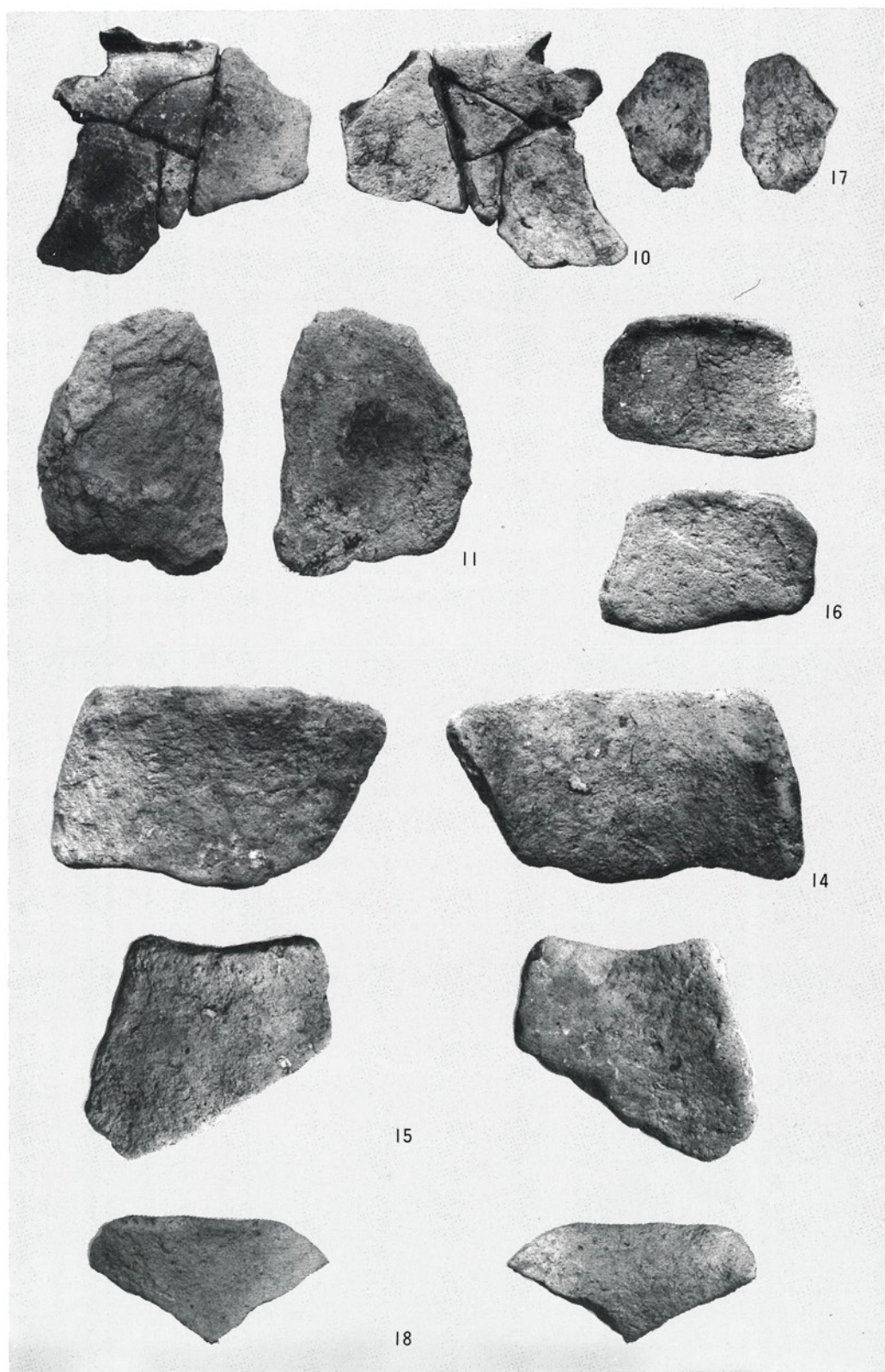
図版15 土器溜り一括遺物



図版16 土器溜り一括遺物



图版17 灰原内出土遺物



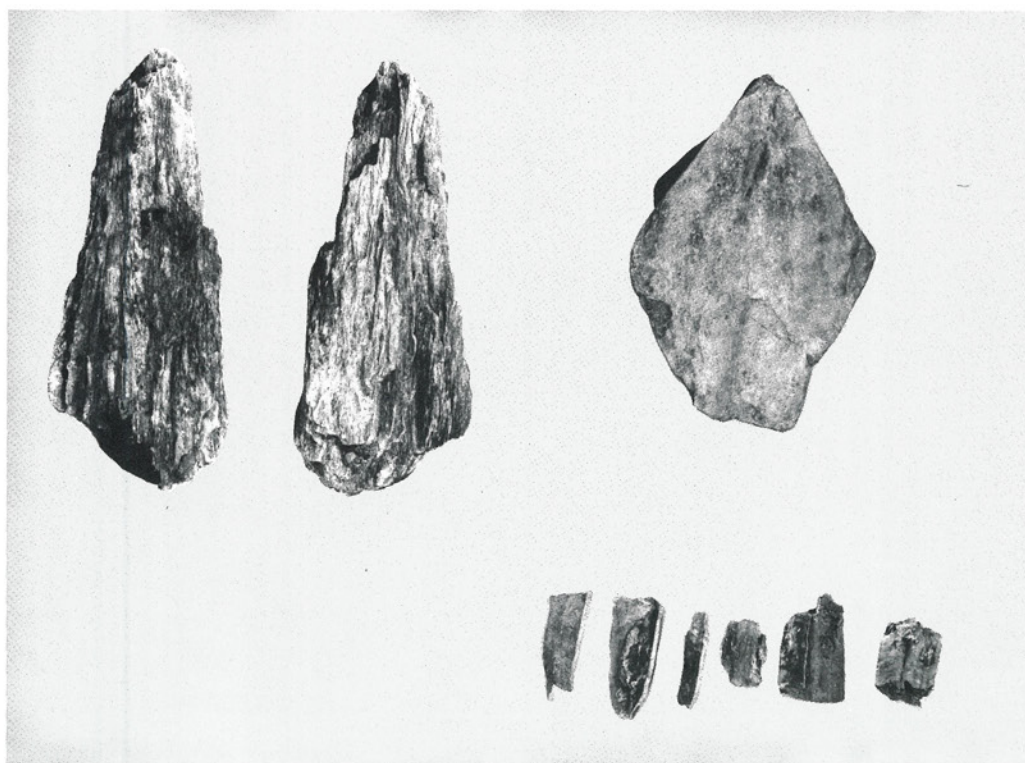
图版18 灰原内出土遺物



図版19 集石内出土遺物

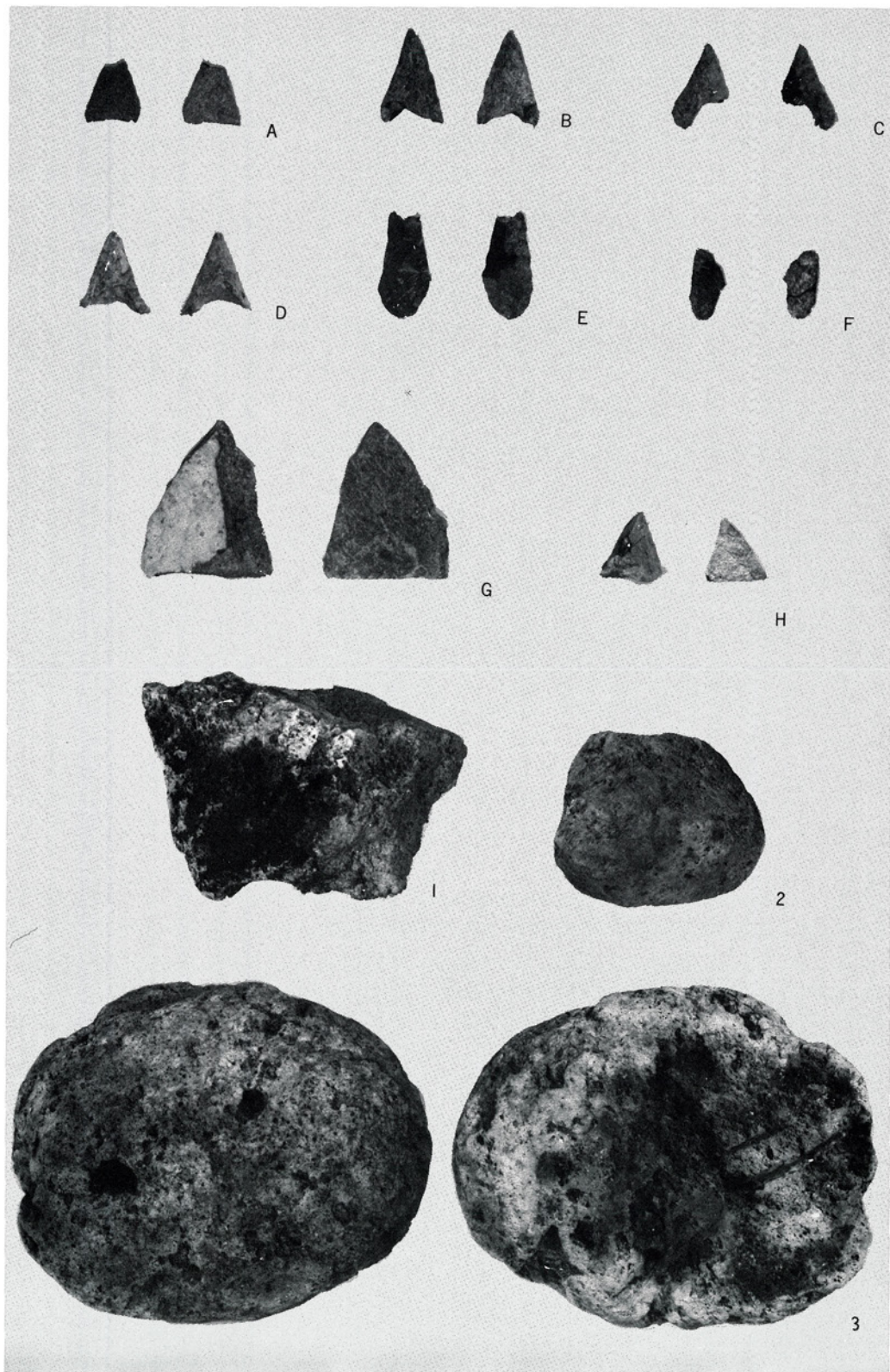


太型蛤刃石斧・有溝礫



22区出土綠色岩・骨

図版21 第22区石器及び自然遺物



図版22 石鏃・剝片・PUMICE



大毛島第23区遺跡調査前



調査後全景

図版23 大毛島第23区全景

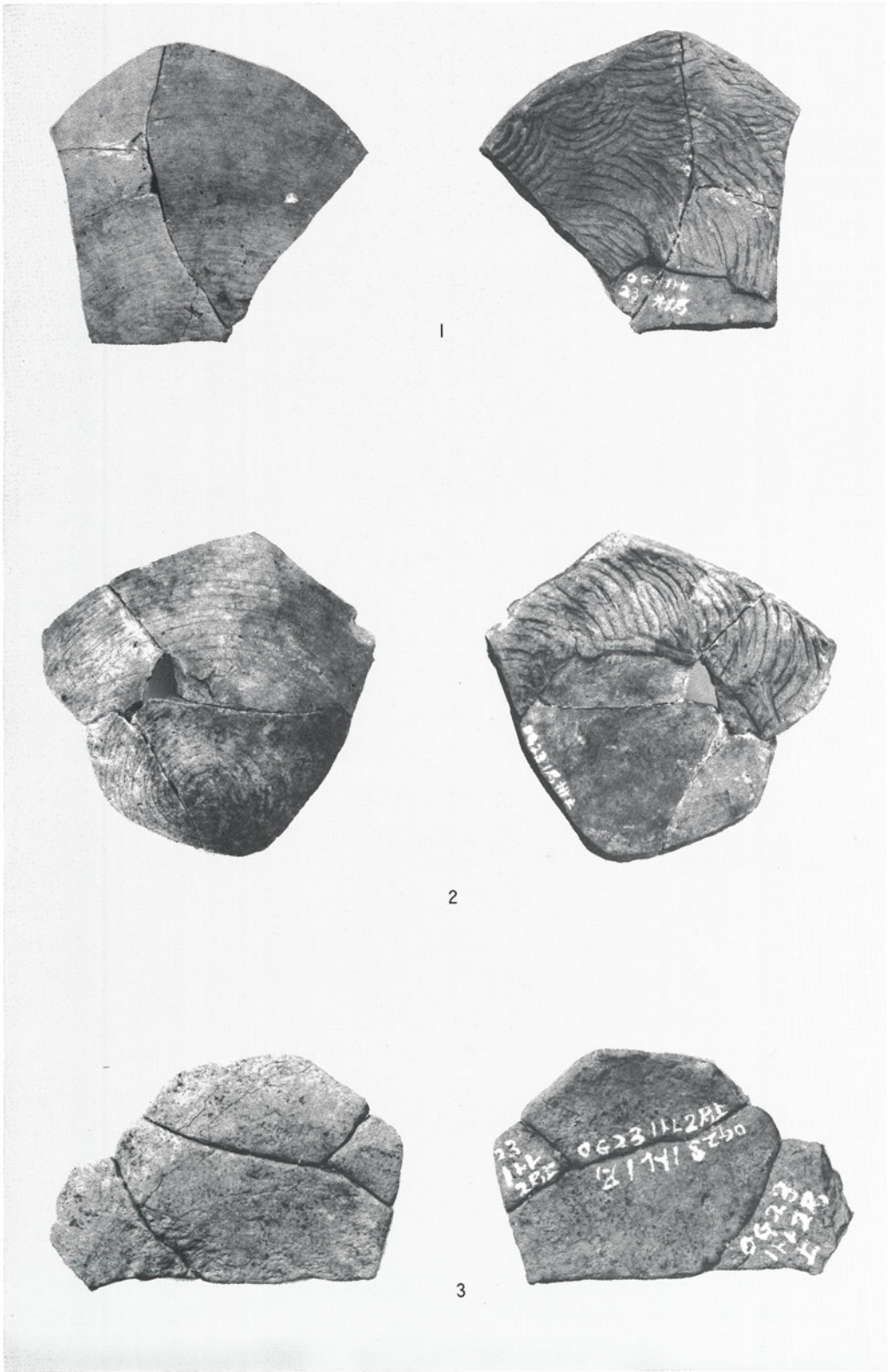


第 1 トレンチ (南より撮影)



第 1 トレンチ (北より撮影)

図版24 トレンチ



图版25 23区出土遗物

徳島県文化財調査概報

昭和56年度

(1981)

発行 年月日	昭和58年3月31日
編集	徳島県教育委員会文化課
発行	徳島県教育委員会
印刷	株式会社教育出版センター